白の下

中川間久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白の下

【Ｎコード】
Ｎ３９６３Ｕ

【作者名】
中川間久

【あらすじ】
『全ての真実が、白日の下に曝される事はあるのか？』……少年の前に突如現れた謎の女は語り出す。かつてこの街で起こった事件とは？やがて少年は真相に迫っていく。

1　謎の女

ビルの隙間の細い路地裏に、少年は走りこんで来た。奥に置かれたゴミ箱や梯子が道を塞いでいるせいで、路地裏の先にはそれ以上進めそうに無い。

ゴミ箱や梯子は、表の華やいだ生活を支えるために日陰の役目を割り当てられた物達だ。それらが人々の視線を集める事は無い。それらは物事の裏側で、真実を支えなくてはならない。

少年は後ろを振り返った。路地裏の狭い入り口には、街が僅かに覗けている。まだ夕方前だというのに、空一面に被さった鈍い雲が、街に確かな暗さを落としている。路地裏の中は静かだ。十二月。冬の冷たい空気は、四隅をピンで留められてでもいるかのように張り詰めている。少年は夏の生まれだが、冬の空気の持つこの緊張感は嫌いでは無かった。

少年は胸を撫で下ろし、呼吸を整える。それからおもむろに、暖かなダウンの内側に隠していた右手を外に出した。その手には、茶色い革の長財布が握られていた。少年はゆっくりと財布を開き、中身を確認した。一万円札が一枚、そこには入っていた。少年は小さくこぼす。

「落とす奴が悪いんだ」

少年の育った家は特別裕福なわけでも貧しいわけでも無かった。ごく一般的で健康な両親の元、この十六年間ごく普通の生活で少年は育ってきた。父は写真を撮るのが趣味で、事あるごとに周りの風景や家族の写真を撮っていた。父と母が出会ったのも、この街に住んでいた若く綺麗な母を偶然見かけた父が、『あなたの写真を撮らせてくれ』と母に頼み込んだのがきっかけだったと少年は聞いてい

る。少年には時にうざったく思える父のカメラ熱に、しかし優しい母は昔から変わらず柔和な笑顔で応え続けている。少年が生まれ、大きな災難も無く、やがてローンを組みながらも、念願のマイホームをこの街の更地に建てて十数年、家族は平穏に暮らしていた。

そのようにこれといって特殊な事の無い家庭で育った少年にとって、拾った財布を交番に届けるか、中に入っている金を抜き取ってしまうかは、誰かがこうと言えば直ぐにそれに靡くほど微妙なバランスで保たれていた。

今手に持っている茶色い長財布は、先程表通りの道の脇に落ちていたのを少年が偶然見つけたものだ。財布が目に入った時、少年はすぐに立ち止まり、辺りを見回した。周囲には、財布に気付いている人間はいないようだった。皆寒さに身をすくめ、雪が降らぬうちにとばかり、忙しなく足早に帰路についているように見えた。少年はしばしその場で動かなかったが、やがて財布を拾い上げた。そしてそのまま歩き出した。財布を隠したりはせず、少年は体の前でそれをしっかりと両手に持った。その姿は周りの人間から見れば、自分の財布を大事に持つ少年の姿であり、仮に財布を拾った瞬間を見た人や、財布を落とした当人から見ても、警察に届ける気概に溢れた健全な少年の姿だっただろう。少年は表通りを堂々と歩いた。そして誰にも声をかけられぬまま、人気の無い通りまで少年は入って来てしまっていた。少年は改めて辺りの様子を窺った。交番はどこにあるかと探しているような顔で。自分を注視する気配は無い。そう判断すると、少年は握りしめた財布ごと、右手を一気にダウンの下に滑り込ませた。そして少年は走った。近くに見えたビルの隙間の路地裏へ向けて。どの瞬間から財布を盗もうと考えていたのか、少年には自分でも分からなかった。

一万円の入った財布を良く見ると、カードを入れるためのポケットに免許証らしきものが差し込まれているのが見えた。僅かに上の方だけ見切れているそのカードには、『山下正雄』と名前が書かれてあった。少年はそれが車か何かの免許証だと判断した。ただ、出

来れば持ち主の名前など読むべきでは無かったと、少年は少し後悔した。そのカードをポケットから引き抜いてしまえば、持ち主の顔写真も見られるかもしれない。注意を欠き財布を落とした間抜けな人間の顔を拝むのも悪く無いかもしれない。しかし、持ち主の情報を得てその人物のイメージを膨らませる事は、今目の前にある一万円札にその人物をうつり込ませる事にもなる。少年にとってそれは必要の無い邪魔な事だった。少年が必要としているのは純粋な金だ。一万円の価値は、ただ一万円であるだけでいい。

少年は金だけに集中し、一万円札に指をかけた。

「もし君が」

突然、声がした。反射的に少年は財布を後ろ手に隠し、そして顔を上げた。路地裏の入り口。そこに女が立っていた。背の高い、見知らぬ女。

「もし君が、その財布を交番に届けなくても、バレる事は無い。沈黙の悪魔は存在する」

いつからそこに居たのか、静かに不気味に、胸の下まで伸びた長い黒髪の女は無表情でそこに佇んでいた。

暗い路地裏の空気が、その密度を増す。女は背が高い。少年が割に小柄であるというのも手伝ってか、女は大柄に見える。少年よりも五、六センチ身長は高そうだが、女の妖しさがそれを更に高く見せている。年齢は三十台半ばだろうか。黒い革のパンツに真っ赤なウールコートという出で立ちで、手には黒ずんだ紅色の手提げ鞄をぶら下げている。きっちりと頭の真ん中で分けられたストレートの黒髪の間からは、白く痩せた顔が不気味に少年を覗いていた。その作りは美人とも言えるだろうが、一瞬抱くそのような印象を直ちにかき消すには、この女の持つ異様さは十分だった。

少年は視線を女に向けたまま、この場から逃げ出す方法を模索した。しかし、後方はゴミ箱と梯子に道が阻まれている。少年を逃がすつもりが女に無いのなら、それらを掻き分けて奥に抜けるだけの余裕を、女は少年に与えてくれはしないだろう。ならば女の脇をす

り抜けて通りに躍り出るしか無いが、狭い路地裏の中で自分より体格の大きい女の脇をすり抜けられるとは、少年には思えなかった。

冷たいはずの空気に包まれながら、少年が額に汗を滲ませて思案していると、女は口元にだけ笑みを浮かべて言った。

「全ての真実が、白日の下に曝される事はあるのか？恐がらなくていい。君に、ある少女の話をしようか」

その表情からは何の意図も感じられないが、その眼は、少年の背中までも見通しているかのような妖しさを備えていた。女の薄い笑みの中に、己の警戒心が溶かされてしまわないように気を張りながら、今はこの謎の女の出方を窺うしか無いと少年は判断する。

そして、女は滔滔と語り始めた。

2　少女の罪

これから話すのは、ある少女の話だ。少し長くなるが、どうか君には最後まで聞いて欲しい。

今から二十年近くも前の話になる。この街にシバウチヨウコという名前の高校生の少女が住んでいた。少女にはささやかな夢があった。大人になったら自分のカフェを持ちたい、という夢だ。少女は幼い頃からコーヒーが好きだった。珍しいかもしれないが、彼女は小さい頃からとりわけ無糖のブラックコーヒーを好んで飲んでいた。苦く香り立ち、ゆっくりと体に沁みこむブラックコーヒーを飲んでいる時は、彼女が全てのものから解き放たれる至福の時間だった。将来はおいしいコーヒーを提供し、来てくれたお客さんを幸せに出来るような、そんな小さな温かいカフェを持ちたい。いつの間にか少女はそういう夢を心に描いていた。

高校に入ってからすぐに、少女はアルバイトを始めた。君は知っているかな?不景気のせいか今はもう無くなってしまったけど、この街には以前『マルジュ』という名前のオープンカフェがあった。レンガ造りの店構えに木や鉢植えが程よく配置されていて、おまけに小さな庭まで付いているような中々素敵なカフェだった。少女はそこでホール接客のアルバイトを始めた。将来のための勉強の意味ももちろんあったが、彼女は単純にそのカフェの空間を気に入っていた。

仕事は楽しかった。店長も他の従業員達も皆良くしてくれたし、大変だと思う事があっても少女にとってそれは即ちやりがいになった。少女は良く働いた。それこそ真面目すぎるくらいに。実際周りの従業員達からも、少女は真面目でしっかり者だと言われていた。そのように充実した日々を送るうちに、やがて少女がマルジュで働き始めて1年半が過ぎていった。

そして今からちょうど十七年前の十二月、ある日曜の午後だった。

その日のマルジュはいつに無い盛況を見せ、店内は忙しく慌しかった。少女は張り切ってホールの仕事に精を出していた。

そんな時、コーヒーを楽しんだとある客の帰ったテーブルを片付けていると、少女はテーブルの上に一つの指輪を見つけた。ハッとした少女は顔を上げた。少女の記憶では、そのテーブルに居た客は確か、若い二十歳前後の男女の二人組だった。少女は辺りを見回したが、しかしその客の姿は既にどこにも見えなかった。少女は指輪を手に取った。銀色のリングにローマ字がいくつか彫られたような、ありふれた指輪だった。それほど高価な物でも無いだろう。だが少女はしばし、吸い込まれるようにその指輪を見つめた。

「すみません」

唐突に、後ろのテーブルの客が少女を呼んだ。

「あ、はい。ただ今伺います」

顔だけを振り向かせて少女は答えた。手の上の指輪をエプロンの腹についているポケットに入れ、少女は自分を呼んだ客の方へと向かった。それから頭の中から一旦指輪の事を追い出し、忙しいホールの仕事を少女はてきぱきとこなした。

しばらくして、少女は仕事の休憩時間に入った。一人休憩室に入り、椅子に腰をかけた。少女はほぐすようにぐるぐると首を回し、手で軽く肩を揉んだ。そしてその手でそのままエプロンを外そうとした時、少女は指輪の事を思い出した。忙しさに紛れ、指輪の件を店長に報告する事を少女は忘れていた。エプロンから指輪を取り出し、少女は再び手の平の上に指輪を置いた。少女は指輪を見つめた。休憩室の安っぽい蛍光灯の明かりを、指輪は芸術的な煌きに変えて反射していた。少なくとも少女にはそのように見えた。ただの小さな輪っかだと言われればそうかもしれないが、その柔らかな丸みと、鋭く硬質な輝きのコントラストは、何か偉大な価値を感じさせるようでもあった。これまでおもちゃのような物を除き、指輪と言えるものを少女は所有した事が無かった。ふいに、少女の脳にある考えが降ってきた。『この手の上の輝きは、指にはめられたらどのよう

になるのだろう?』

手はすぐそこにあった。まるで奇跡的な偶然のように指輪を乗せて待っている。少女はおもむろに指輪をつまみあげた。一瞬だけ。そう心の中で呟くと、自分の左手の薬指に少女は指輪をはめた。

指輪のサイズは少女の薬指のそれよりも大きかった。しかし、本来そこにあるべきもののように、指輪は少女の手に馴染んでいるみたいに見えた。少女は手の平を返して甲を見た。そこにあったのは、幼稚な自分の手では無い誰か知らない大人の手だった。

「綺麗」

思わず少女は口にした。それをきっかけに、少女は我に帰った。急いで指輪を外し、懺悔でもするかのように、あるいは罪をひた隠すかのように、少女は両手で指輪を握りしめた。指輪は他人の物であり少女の物ではない。客がこの指輪を探しに来たらすぐに返さなくてはならない。客が探しに来たら。探しに…来なかったら?握りしめた両手を少女はゆっくりと開いた。指輪を落とさぬようにそっと。そこでは端正な輝きが、生真面目に少女の返答を待っていた。

ふっ、と少女は気の抜けた息を漏らした。何を考えているのだ自分は、と自嘲した。客がどうかに関わらずこれは店長に渡す。それで自分のやるべき事は終わりだ。それ以上の事を考える必要はない。そうだ、今度の休みに洋服を買いに行こうと思っていたから、その時指輪も見てみるといいかもしれない。そう思った少女がエプロンのポケットに再び指輪をしまった時だった。休憩室の扉が勢い良く開いた。

開いた扉の向こうには、店長と、大学生のアルバイトのマリちゃんがいた。店長とマリちゃんは少女を見て口早に続けた。

「ヨウコちゃん、どこかで指輪なんて見て無いよね?」

「だから違うって店長。あたしらはずっとホールにいたけどそんなの無かったもん。ヨウコちゃんが見つけてたら直ぐ言うでしょ」

少女の血や、汗や、皮膚の感覚までもが、体の後ろ側へと逃げて行った。光を当てられたネズミ達が暗闇を求めて逃げ走るように。

いや、ちょうどさっき君が反射的に財布を体の後ろに隠したように、かもしれない。少女の目に映った店長とマリちゃんの顔は、まさか少女が指輪を持っているとは思っていないような顔であり、同時に、事の全てを知りながら敢えて少女を試しているような顔でもあった。少女の口から、声が漏れた。

「いや」

事実を告白しなくてはと思う少女の思考を何かが制止していた。そして躊躇する少女の理性とは裏腹に、少女の本能は迅速な命令を出した。これ以上間を空けてはならない、と。

「わかりません」

気付くといつの間にか少女はそう口にしていた。店長とマリちゃんは、突付き合うように再び喋り出した。

「まあヨウコちゃんが持ってるわけないか。じゃあお絞りに紛れて捨てられちゃったのかもしれないな。一応ゴミ箱探してみるか」

「ええ、まじですか？絶対あの客の勘違いだって。この忙しい時に」

「出来る限りはしよう。これも仕事です」

「はーい」

二人は休憩室を出て行った。

取り残された少女はお腹のポケットを押さえた。少女の理性が、己の命令系統を取り戻していく。休憩室の扉の向こうで、人々はこの指輪を捜している。刻一刻、それこそ刻一刻と、少女の罪が膨らんでいくのが彼女自身にも分かった。

何故自分は嘘を付いてしまったのか。急がなくてはならない。今ならまだ間に合う。一秒でも早く、この指輪を客に返す。少女はポケットから指輪を取り出し、それを左手でぎゅっと握りしめると、すぐさま立ち上がって休憩室を出た。

休憩室を出て、厨房を通り抜けると、すぐそこにあるレジの場所に、店長と向き合って二十歳前後の男女が立っていた。やっぱりこの指輪だ。少女が確信したその時、彼女の脳に、あるアイデアが浮かんだ。自分がこの指輪を、今どこかで見つけたフリをして彼らに

渡す事は出来ないのだろうか。全ての罪を無かった事にして。
しかし、少女の思惑の実現性はすぐに薄まって行く。その嘘の演出が容易では無い事を、少女は素早く理解したからだ。まず厨房で指輪を見つけるのはおかしい。そして、若い男女が座っていたテーブルには今は誰もいないが、さすがにそこはもう店長だかマリちゃんだかこの客の二人組だかが既に捜索し終えているだろう。指輪が落ちていれば一目でわかる通路もダメだ。となると、お絞りやカス等を捨てるゴミ箱。でも、厨房の奥にあるゴミ箱には、今既にマリちゃんの手が突っ込まれている。ならばトイレは？いや違う、そうじゃない。そもそも全て捜して見つからなかったからこそ、マリちゃんはゴミ箱に手を突っ込んでいるのだ。
「まだ休んでいていいのに」
その声に少女はビクリとして、危うく左手の指輪を落としそうになった。気付くと少女の脇に店長が立っていた。
「いえ…もう大丈夫です」
少女は答え、店長から目を逸らした。できるだけ自然に。
「そうか。ありがとう」
店長はそう言って客席に顔を向け、手を挙げてこちらを呼ぶ客に会釈をすると、静かに、それでいて素早い足取りでそちらへ注文を受けに向かった。
少女のすぐそばにあるレジの前には、指輪を無くした二十歳前後の男女が立っている。その二人の目を見ないようにして、少女は彼らの様子を窺った。二人のうち、男の方が言った。
「ここで無くしたんじゃないのかもな」
女は答える。
「そんな事無い。ここに来た時はしてたもん」
救いを求めるような女の声が、少女の内臓に突き刺さった。
「いや、ここを出た後とか」
漏らした男の言葉に、女は語気を強めて言い返す。
「出てからは無くす機会なんて無かった」

「でもテーブルに無かったなら」
「何でそんなに悠長なの?信じられない!」
女の焦りや怒りや悲しみが、理不尽に男を襲っていた。少女は、自分の体を鈍く重くして行く毒のような何かを、弱い吐息に変えて少しずつ体の外に吐き出した。少女は恐ろしい妄想をした。もし、この指輪がこの女にとってすごく大事な、例えば誰かの形見であったら?そうで無くても、これは実はとても高価な指輪なのかもしれない。
その時、少女の目に止まったのは女の肩からぶら下がっている白い鞄だった。そこに、自分の持つ指輪を気付かれずに入れる事は出来ないのか。自分の手札を隠しながら相手の手札の中身を探ろうとする博徒のような目で、少女は女の鞄を薄く睨んだ。
「あなたは指輪を見てないの?」
声に少女は顔をあげた。女は少女の顔を真っ直ぐに見ていた。それは少女に向けられた質問だった。湧き起こりそうな身震いを全力で体の底に押し戻して、少女は言った。
「はい…すみません」
それを口にした瞬間、少女は自分がもう後には引けない事を悟った。
「あなた、私達があそこの席に座っている時もいたよね。あの席を片付けたのはあなた?覚えてる?」
少女は自分を落ち着かせようとした。女は別に私が指輪を盗んだと疑っているわけではない、と少女は思いこんだ。
「ちょっと忙しくて…すみません」
そう答えながら少女は男の方に目を遣った。何も言わず静かに少女を見つめる男の視線は不気味だった。
「そのエプロン」
女は言う。
「お腹にポケットが付いてる。テーブルを布巾で拭いた時、テーブルの上で弾かれた指輪がその中に入っちゃう事は無いのかな」

「おい」
男が女を諌めた。少女は思った。ポケットに指輪を入れていなくて良かった、と。しかし何か、話が嫌な方向へと進み始めている事も少女は察知した。
「違う、この子を疑っているんじゃない」
男を落ち着かせるように、女は柔らかい声で言った。そして次に、女は流れるような動きで、少女のエプロンのポケットを真っ直ぐに指差して言った。
「でも、自分が望んでいなくても、予期せぬものがそこに入る事だってある」
その細長い人差し指に腹を貫かれたような気がして、少女は思わず腰を引いてしまいそうになった。しかしそれは何とか堪え、少女は逆に思いきり腹を張って見せた。そして必死にポケットを両手で叩き、生地を伸ばし、少女は女に自分の無実を示そうとした。堂々としなくてはならなかった。
「何も入っていません」
だが。言ったその瞬間、少女は自分の犯した過ちに気が付いた。そして少女は急いで、【開いてしまっている右の手の平】を閉じた。頭の血の気が引いていくのを少女は感じた。左手は、閉じたままだ。指輪を握っている左手はずっと。
少女はゆっくりと両手を背後へと運んでいった。自分の目が泳いでいくのを少女は感じた。けれど少女はそれを止める事ができなかった。やってしまった。今のはかなり不自然だ。右手だけを開き、左手は握ったまま自分はポケットを叩き、伸ばしていた。その左手はとても妖しいはずだ。目の前の二人は、それに気付いただろうか。
少し下方に目線を向けた少女には、二人の顔を見る事はできなかった。そして、男が口を開いた。
「ほら、入って無いじゃないか。指輪なら、また買えばいい。また俺がもう一回同じものを買うよ」
男は気付いていない。左手の違和感に気付いていない。なら女は

？あと女さえ気付いていなければ、自分は助かる。逃げられる。
唐突に、少女の足は震えだした。以前の何事も無かった平和に、あと少しで手が届くと思うと、少女の体は震えを抑えられなかった。少女は祈った。
女の声は、聞こえなかった。まだかまだかと待つ少女の気持ちを、まるで知って楽しんでいるかのように、女の沈黙は続いた。その時間は少女にとっては永遠に近いものがあったが、少女がもう倒れてしまう限界というような所で、女はついに口を開いた。
「違う」
びくり、と音がするくらい少女の体は一瞬掴み取る事が出来なかった。女は続けた。
「同じものを買えばいい？違うでしょ？やっぱりあんたはいつも分かってない」
言葉の意味を、少女は一瞬掴み取る事が出来なかった。しかし徐々に、それがどうやら自分に向けられた言葉では無い事を少女は理解していった。それからゆっくりと少女が目線を上げると、そこには呆れたような顔を男に向けている女がいた。女は少女の方に目を移した。しかし、少女に何を言うでも無く、そのまま女はくるりと踵を返して店を出て行った。そしてちょうどその時、厨房からマリちゃんが出て来た。
「ええと、あれ？」
その場の空間に漂う妙な空気に、マリちゃんはすぐに気が付いたようだった。残された男は、マリちゃんが何も手に持って来ていないのを目で確認し、少女とマリちゃんに対して申し訳なさそうに言った。
「ああ気にしないでください。指輪は無かったんですよね。もう大丈夫です。大したものでも無いですし。すみません、お騒がせしました」
それから男は改めて少女だけを見て言った。
「ごめんね」
そして女と同様、男もまた踵を返して店を出て行った。

少女の体から、徐々に緊張が解けていった。同時に、体は再び鈍く重くなっていった。しかしいずれにせよ、指輪を持っている事は、客の二人にバレなかった。そして、指輪を返す事は出来なかったが、それがそう大事なもので無い事もわかった。自責の念の中、少女は胸を撫で下ろしていた。その安堵感に、少女は少し快感すら覚えていた。

「ありゃあ。うーん、この店には無いと思うんだけどねえ。ていうか女の人は？」

気の抜けた声で、マリちゃんは男の去って行った店の入り口を見て言った。

「先に帰っちゃいました」

少女が答えると、マリちゃんは少女の方を向いて言う。

「まあ…見つかるといいけどね。指輪」

そして彼女は自分の手を上げて、それを少女に見せつけると、歯を見せて笑った。

「とりあえず手洗ってくるわ」

マリちゃんの手はゴミに触れたせいか少し湿っていた。少女は僅かに微笑みを返して言った。

「そうですね」

少女は左手を力強く握り締めた。

結局、それから少女は指輪を自分のロッカーに置いた財布の中に忍ばせ、その日の勤務をやり過ごした。そして勤務時間が終わり、誰にも見つからず指輪をマルジュから外へと持ち出す事に、少女は成功した。

その夜、家に帰った少女は部屋に閉じこもると、財布から指輪を取り出し、改めてそれを見つめた。厳然として手の平の上で光る銀色の指輪は、少女が罪を犯した事を確かに示していた。しばらくそれを見つめてから、突然少女は、手に止まった蠅でも払うように指輪を机の上に振り落とした。

少女の頭に、指輪を無くした女の悲愴な顔が蘇った。自分の罪の

結果が目の前にある事はもちろん理解していたが、何食わぬ様子で鮮麗な輝きを放つその指輪を見ていると、それは何故求める人の所に行かず、何故今求めていない自分の所にいるのだろうと少女は苛立ちを感じた。しかし、指輪に罪は無い。家への帰り道、少女は何度も指輪を投げ捨てようかと思ったがそれは出来なかった。指輪の憐れな所有者の事を思うと投げ捨てる行為は躊躇われたし、指輪を捨ててしまえば、自分の罪が更に重くなる気もした。せめてその指輪をどこかの誰かが有意義に使ってくれれば、まだ自分は救われる気がすると、少女はそう思った。少女には、納得が必要だった。

少女は思い出していた。指輪を無くした女が立ち去る直前、隣の男に向けた呆れるような表情を。その男が、最後少女に『ごめんね』と言った時の申し訳無さそうな表情を。マリちゃんが、『とりあえず手洗ってくるわ』と言った時のやんちゃな笑顔を。休憩はもう大丈夫と少女に言われた店長が、『ありがとう』と言った時の、いや、それは目を伏せていて見ていなかったが、きっと彼は優しく微笑んでいたのだろう。

勤務を終えた後、マリちゃんが少女に、指輪を無くした男女のやりとりについて詳しく聞いて来たので、少女が状況を説明するとマリちゃんはこう言った。

「え、何それ。その女ちょっとワガママすぎない？『また俺がもう一回同じものを買う』って事はそれ彼氏からのプレゼントの指輪って事だよね？男の方も女の気持ちを理解して無いのかもしれないけど、自分で指輪を無くしておいて怒って帰っちゃうのはちょっとひどいよね」

「…はい」

「あれ？あはは。あたしの感覚がズレてる？」

「え？いや。あの女の人、ちょっとひどいですよね」

少女は自分の持つ真実を押し殺し、女の陰口を叩いた。少女の所為で不幸に見舞われた女を、その時少女は罵った。

そして今、何食わぬ顔で少女は女の事を同情するように憂えてい

る。その日あった沢山の事を思い起こし、自分の犯した罪が決して一つでは無い事を少女は理解した。

店長は物腰の柔らかい人で、マルジュで働き始めてから彼が怒っている姿を少女は見た事が無かった。従業員に対してはいつも優しく、こちらが少しでも疲れている表情を見せたりなどすると、店長は直ぐにこちらを気遣ってくれた。店長の仕事ぶりは迅速で的確で、彼は責任感も強かった。いずれは自分もカフェを持ちたいと思っている少女にとって、その姿からは学ぶべきものが多くあった。そんな店長に「しっかりしてる」と褒められると、少女はいつも嬉しくなった。

マリちゃんは少女にとってはバイトの後輩だが、年齢は三つ上のお姉さんであった。マリちゃんはマルジュで働き始めてまだ二ヶ月と経っていなかったが、素直で明るい彼女は、マルジュに来てすぐに従業員達皆と打ち解けていた。彼女の出勤シフトは、大学の授業の無い日の朝や昼が多かった。そのため、平日は高校へ行った後にマルジュへ来る少女と、マリちゃんの勤務時間が重なるのは、日曜日くらいしか無かった。しかしそれでもマリちゃんは、少女に対しても距離を置かずに接してくれた。そんな彼女の太陽のような笑顔は、いつも少女を癒してくれたし、また彼女の開放的で自由な性格は、生真面目な少女にとって羨ましくもあった。

明日から、少女はまたマルジュへ仕事をしに行く。ただ少女には、明日からも素知らぬ顔をしてマルジュで仕事をこなせる自信があった。今日だって、指輪を財布にしまってからは通常通り仕事をこなしていたのだ。明日からもそれが出来ないはずは無い。

少女は机の上の指輪から一旦目を離し、自分の部屋を出た。そしてキッチンに行き、コーヒーを淹れた。少女の家にはサイフォンもあったが、彼女はペーパードリップの抽出の方が好きだった。サイフォンを上手に扱う技術が自分には無かったからかもしれない。その日は、グアテマラのアンティグアという地方の豆を使った。アンティグアは世界遺産にも登録されており、教会、聖堂、修道院等が

壮麗に建ち並ぶ聖なる土地だ。

出来上がったコーヒーを一口飲んだ時、彼女は気付いた。自分は今日、大好きなコーヒーを提供するカフェで、罪を犯したのだと。自分を解放してくれるはずのコーヒーには、もはや罪の味がべっとりと練りこまれていた。少女は一瞬だけ口を付けたコーヒーカップをリビングのテーブルの上に置き、それをじっと眺めた。少女は誓う事にする。この指輪の一件を最後に、自分はもう正義に背く事はしない、と。

そして少女は、自分には指輪に関して最後にもう一つやらなければならない事があると思った。それは、もう持ち主の所へは戻れない銀色の指輪に、せめて別の、誰か大切に使ってくれる新しい主人を見つけてやる事だ。それが指輪のためにせめて少女が出来る唯一の事だった。それを片付けて、指輪の一件は少女の中で終了する。

次の日。月曜の朝、少女は学校へと出掛けて行った。銀色の指輪を鞄の中に忍ばせて。少女には、指輪を盗んだ罪を誰かに告白し懺悔する事は出来なかった。また、指輪を所有し通し、罪を背負い続ける覚悟も少女には無かった。かといって指輪を捨ててしまうのはやはり気が引ける。となると、指輪を誰かに譲渡する選択肢しか少女には残されていなかった。少女に迷いは無かった。

少女は既に、指輪を渡す相手を決めていた。同じクラスのトモちゃんだ。彼女ならこの指輪を有意義に使ってくれるのでは無いかと少女は考えていた。少女の高校はいわゆる進学校であり、校則はそれなりに厳しく、校内でアクセサリー類を着用する事は禁止されていた。しかし、学校でトモちゃんが密かに付けていたネックレスを、担任の先生が没収していたのを少女は見た事があったし、休日に偶然街でトモちゃんの私服姿を見かけた時は、彼女が指輪も付けていたのを少女は覚えていた。少女にとってトモちゃんは特別親しい友達というわけでは無かったが、かといって話しかけるのが不自然な相手というわけでも無かった。トモちゃんの普段から醸し出している気さくな雰囲気も手伝って、指輪を貰ったら彼女は喜んでくれそ

うな気が、少女にはしていた。
昼休み、トモちゃんが一人になった時を見計らって、少女は彼女に声をかけた。
「トモちゃん」
自分の席に座っていたトモちゃんは顔を上げて少女を見た。
「ん、なに？」
「トモちゃんさ、この指輪、良かったらいる？」
トモちゃんは少女の手の上に乗る銀色の指輪を見た。そして再び少女の顔に目を戻すと、
「え？」
と一言だけ言った。目を丸くしている彼女が更なる説明を求めている事を、少女は理解した。
「ああ、これ昨日中学の時の友達にたまたま貰ったんだけどさ、私指輪とかしないから。トモちゃんならどうかなと思って」
「…え、指輪？え、何？何で？私貰っていいの？ていうかサイズは？」
矢継ぎ早に繰り出される質問に、少女は少したじろいだ。
「え、わからない。ちょっと大きいかも…。でも他にあげるような人いなくて」
トモちゃんはゆっくりと少女の顔と指輪を交互に見比べた。
「いや…まあ、貰っていいなら貰うけど」
「本当？良かった」
「え、でもいいの？」
「うん、全然気にしないで。じゃあ、はい」
少女は指輪をトモちゃんの机の上に置いた。
「はは、ありがとう」
トモちゃんはニッと笑った。その瞬間、胸がねじり絞られるような痛みを少女は感じた。少女はトモちゃんから顔を逸らし、その場を立ち去った。
少女は教室を出て廊下を歩きだした。別に教室を出る必要など無

かったはずだが、自分はトモちゃんの目の届く所に居てはいけない気がしていた。少女は気付いた。裏にあった自分の本心に。

誰か新しい主人の下へ指輪を届ける事が、指輪のためにせめて自分に出来る事。と思っていたのはしかし、少女が己の本心を隠すための詭弁だった。心の内ではその実、自分の犯した罪に誰かを巻き込んで、その罪を分配し、己の罪悪感を軽くしたいと、少女は思っていただけだった。指輪を捨てたく無かったのは、ただそれが理由だったと少女は気付いた。トモちゃんは知らない内に、少女の罪の一部を受け取った。感謝の笑顔を代償に。少女が自分の母親に指輪をあげなかったのは、身近すぎる人間を罪に巻き込みたく無かったからだろう。少女の中で、盗んだ指輪を何も知らずに受け取ったトモちゃんの笑顔が、指輪のあるはずも無いゴミ箱に手を突っ込んだマリちゃんの笑顔と重なった。二人の屈託の無い笑顔は似ている。無垢で、純潔で、欺かれてはならない笑顔だ。少女はその笑顔を、弄んだ。

正義に背かないと誓った少女は、したたかでこす狡い少女に直ぐに押しつぶされてしまった。マルジュの休憩室を出て、正直に罪を告白しない方法を模索し出したあの時もそうだった。少女は同じ事を繰り返す。

その日、学校の授業が終わってからマルジュへ行くと、店長が普段と変わらぬ様子で接客に精を出していた。少女もまた、いつも通りの真面目で誠実な、少なくともそう見える態度で仕事に励んだ。次の日曜日、マルジュでマリちゃんにも会ったが、彼女もまた相変わらずの様子で仕事をしていた。少女も例によって、卒なくしっかりと仕事をこなした。トモちゃんと少女は、指輪のやりとりがあってから特にこれといって会話を交わして無いが、お互い平和に平穏に暮らしている。トモちゃんが校外で普段、銀色の指輪を身に付けているのかどうか、少女には知る由も無い。

そうして、少女の中で指輪の一件はひとまず終わった。結局彼女が、己の罪を償う事は無かった。

3　沈黙の悪魔

少女の話を語り終え、路地裏の入り口に立つ女は続けて言う。
「君は、この少女の話をどう思う?十七年前、この街に実在した少女の話だ」
少年は拾った財布をまだ自身の背中に隠している。女は更に続ける。
「それがどんな財布であれ、拾われた財布は拾った人間にその責任を委ねる。銀色の指輪がそうであったように。そして、少女の話には続きがある。さて、君にはその続きを知る義務は無い。だが、その資格がある。話を聞く資格がある」
そう言うと女は押し黙った。少年は女の思惑を量ろうとした。しかし、女の真意は、いくら考えても少年には見えて来なかった。女の心の内が分からないだけに、下手に動く事も少年には出来なかった。何かを言うべきかと思ったが、何を言葉にすれば良いのかも見つからず、少年はただ女の瞳を捉え続けた。女は、古代の壁画のように意味を含んだ表情のまま固まっている。路地裏の外からホウと舞い込んで来た風が、時間をかけて静まると、女は言った。
「少女は罪を隠し通した。しかし、沈黙の悪魔は少しずつ少女を蝕んで行く。忘れ去られたと思っていた少女の罪は、ある時ふいに、彼女の前に再び姿を現す事になる」
女は再び語り始めた。

やがて、時が流れて行くに連れ、少女は自分の罪を忘れていった。たまに指輪の事を思い出した時には、もう二度とあんな事はしないと深く心に誓い直しながら、一方で、真面目すぎる自分はたかが一個の指輪でどれだけ思い悩んでいたのだろうと、当時の自分を滑稽に思ったりもした。ともかく、指輪の一件は既に過去の事であり、

自分は充分苦しみ反省したわけで、少女にとってそれはいつまでも引きずっていても仕方の無い事だった。少女の周りの人間達は真実など知らないまま、暢気に日々を過ごしている。世の中には、気付かれないままの罪などきっと沢山あるのだろう。コーヒーに混ざっていた罪の味も、いつの間にか消え去っていた。

そして半年が過ぎ、高校三年生になった少女は、大学受験勉強に集中するためマルジュでのアルバイトを辞める事になった。マルジュを辞める最後の出勤日には、少女の頭の中は既に受験の事で埋め尽くされており、彼女は接客に集中を欠いていた。レジで会計を済ませた客が「ごちそうさま」と言ってくれたのに気付かず、「ありがとうございました」と礼を述べるのを忘れた事を、少女はマリちゃんに注意された。しかし、反省した少女が名誉挽回をするチャンスはもう殆ど残されておらず、そのまま彼女はマルジュでの最後の日を終えた。少女の去り際は、あっけないものだった。

その後、大学へ進学した少女は、いや、もう少女では無いか。ここからは元少女と呼ぼう。大学へ進学した元少女は一人暮らしを始めた。実家から大学までは少し遠かったからだ。

大学に通い、自分のこれからを現実的に考えるようになると、元少女は将来的に自分のカフェを持つ事に対して少しずつ疑問を抱き始めた。自分の店を開くためには、それが小さな店だとしても、少なくない初期投資費を用意しなければならない。それに、店を持ったところで赤字が重なれば経営は続かない。現実的な話、マルジュだってオーナーの出資を頼りながら毎月家賃を支払って営業していたと、働いていた当時に元少女は聞いていた。

社会の情勢は、必ずしもカフェを中心に動いているわけではない。元少女は世の中を動かす金について考える事が多くなった。

そしてこの頃から、元少女は酒を覚え始めた。彼女はコーヒーも相変わらず好きだったが、酒もまた同じくらい好きになっていった。元少女はたまに、一人でバーに飲みに行く事があった。バーには、経済社会の荒波の中で生き抜いている大人達がいる。元少女が一人

バーで酒を飲んでいると、誰か他の客に声をかけられる事も少なくなかった。元少女はそこで出会う大人達の話を聞くのが好きだった。バーで知り合った男の何人かとは、元少女は女として付き合ったりもした。

付き合った男達は、皆充分に金を持っていた。少なくとも元少女よりは格段に多く。男達は特別苦労も無く、元少女に色々な物を買い与えた。服も、バッグも、そして指輪も。かつて元少女が盗んだ銀色の指輪とは、恐らく比べ物にならない程高価な指輪を、男達は簡単に元少女に与えた。それを笑顔で受け取りながら、内心彼女は、この男達は金の使い方を間違っているのでは無いかと思った。そして同時に、高校の時経験した指輪の騒動は、一体何だったのだろうかとも思った。あれは騒動と呼ぶにもおこがましい、実に瑣末な出来事だったのか。

元少女と男達の交際関係は、毎度長続きする事が無かった。誰と付き合ってみても、彼女はすぐに飽きてしまっていた。元少女は昔を思い出し、感じていた。マルジュで生き生きと働いていた時のあの楽しさは、一体どこへ行ってしまったのか。金が無ければ店なんて持つ事はできないという前提を無視して、がむしゃらに接客を学び、ひたむきに夢を描いていた頃は、どうして楽しかったのか。

ある時彼女は、一人で酒を飲んだ帰り道、一件のコンビニエンスストアに立ち寄った。少し飲みすぎた彼女は、水でも飲んで酔いを醒まそうかと考えた。そして５００ｍｌの水のペットボトルを手に取った時、彼女は考えた。たかが水でどうして百円以上もするのか。金の使い方はこれで良いのだろうか。ふと他の棚に目を移すと、缶コーヒーが目に入った。ちっぽけな缶コーヒーもその少ない量に関わらず、また百円を超えていた。元少女は無糖でブラックのものを選び取ると、手に提げていたバッグの中にそれを入れた。缶コーヒーは、上に被さったストールに隠されて外からは見えなかった。そして元少女は水だけをレジに持って行き、会計を済ませ外に出た。

元少女は足早に歩き出した。自分を呼び止める声はしない。なる

べく速く、しかし走ってはいけない。目立ってはいけない。顔を上げず、正確に素早く足を前に出す。そのようにしてだいぶ歩いてから、元少女はその足取りを徐々に遅くしていく。ゆっくり息を吐くと、自分の体が緊張していた事に元少女は気がついた。バッグに被さったストールを掻き分けると、そこには会計を済ませていない缶コーヒーが、世の中の経済システムを嘲笑うかのように姿を見せた。

簡単だ。つまらないくらい、簡単だ。元少女は思った。彼女は缶コーヒーを取り出した。その硬く冷たい感触が手の平に伝わって来た時、彼女は銀色の指輪の事を思い出した。そしてそこで、彼女はようやく気付いた。あの時、誰にも罪を告白しなかった自分。その自分が、あれからずっと己の首を掴んでいた事に。それは狡く、嘘つきで、他の誰の目にも付かない自分だ。

元少女は、その自分の事を、沈黙の悪魔と呼んだ。高校生の時、銀色の指輪の真相を沈黙し、誰にもそれを気付かれずにやり過ごした後、元少女の沈黙の悪魔は姿を消した。しかし、そのように思えていたそいつは、実際は水面下にずっと潜んでいて、浄化される事無く元少女の喉元を掴み続けていた。そしてチャンスがあればいつでも、そいつは元少女を誘惑しようとしていた。『大丈夫、あたしを知っているのはあなただけ。バレないさ、また罪を、犯してしまえ』と。

元少女は缶コーヒーを固く握りしめた。マルジュで銀色の指輪を握りしめた時のように。タブを開け、缶コーヒーを一口飲んでみる。そこにはかつてのような罪の味があった。元少女は後悔した。しかしそのコーヒーの味のどこかに少しだけ、彼女は奇妙な心地良さも感じていた。

元少女は考える。この沈黙の悪魔を消滅させる方法は無いのか。こいつの存在を誰かに見つけてもらえれば、こいつは消え去るのだろうか。それともこいつは一生消えないのだろうか。酔いは、すっかり醒めていた。

それからしばらくしたある日、薬局を訪れた元少女は再び万引き

をしていた。店を出てから自分でそれに気付いたくらい、ごく自然に万引きをしていた。その時も、彼女は誰にも咎められなかった。沈黙の悪魔は、またしても元少女に罪を犯させる事に成功した。元少女は後悔し、反省した。そして元少女は、自分の中で沈黙の悪魔が以前よりも大きくなっていっている事に気が付いた。罪を餌に、そいつは少しずつ成長していっていた。

元少女はどこかでまた万引きをした。そして沈黙の悪魔の誘惑は大胆になっていく。元少女は万引きを繰り返す。一度の万引きで盗む品数は増え、彼女はやがて、チャンスさえ目の前にあれば置き引きやスリも行うようになっていった。そして、そのように罪を重ねていっても、その罪が誰かに知られる事は決して無かった。元少女は危険を感じていた。走り出した列車から飛び降りるには、まだスピードが遅い内でないといけない。しかし、やめなくてはこんな事、と思う元少女の気持ちとは裏腹に、彼女は罪を重ねて行く自分を制する事が出来なかった。そしてその間にも、沈黙の悪魔の列車は順調に速度を上げていった。

ある時、道端で荷物を地面に置き、無用心にそっぽを向いて電話をしている男の赤黒いスーツケースを、元少女は静かに持ち去った。スーツケースを開けてみると、中には貴金属や宝石が大量に入っていた。それらがどれ程の価値を持っているのか元少女にはわからなかったが、彼女はそれを見てさすがに尻込みした。この宝石類を売り飛ばすのは危険だ。どこから足が付くか分からない。だが家で保管するのも危ないかもしれない。警察に届けて自分が質問攻めに合うのもリスクが高すぎる。処分に困った元少女は、その赤黒いスーツケースを地中に埋めてしまおうと考えた。そして彼女は、実家の近くで長年野ざらしになっている土地に、赤黒いスーツケースをひとまず埋める事を決意した。人目の付かない夜中に彼女はそれを実行し、再び日常の生活に戻った。

それから元少女はまた日常の中で盗みを繰り返した。そして相変わらず、彼女の沈黙の悪魔を見つけ出す人間は、誰一人として現れ

なかった。

そんな事を繰り返しているうちに二年が過ぎた。元少女はバーで一人の若い男と出会った。理由は分からないが、一目見た瞬間、彼女は彼の事が気になった。男は背中を丸め、力の無い眼をしていたが、彼女はその男に惹かれるものを感じた。元少女は男に声をかけた。突然話しかけられた男は驚いて、眼をこれでもかと開いて元少女を見つめた。そしてしばらく男はそのまま、くりくりとした眼球で元少女を観察し続けたが、やがてその眼は次第に力の無いものに戻っていった。元少女が、何の酒を飲んでいるのかと尋ねると、男は間を置いて、ブラックルシアンだと言った。元少女が同じものを注文しそれを飲み、おいしいと言うと、男は、ブラックルシアンはウォッカにコーヒーリキュールを注いだ物だと言った。元少女は男と関係を深めようとした。元少女にとって男は、どこか懐かしさを感じさせるくらい安心できる雰囲気を持っていた。しかし男は、「君とここで会えたのは運命的だ。しかし僕にはもう関わらない方がいい」と言い、程なくしてその場を立ち去って行ってしまった。

元少女はまた男に会いたいと願い、それから毎日その店に通った。そこまで誰かを好きになったと、彼女が自分で思えたのは初めてだった。そして男が再び店に現れたのは、一ヵ月後の事だった。元少女はこの機会を逃すまいとしつこく男に言い寄った。「君を僕の事情に巻き込みたくない」と男は言ったが、元少女は諦めなかった。彼女は詳しい説明を求め、男は観念したように、「場所を変えよう」と言い、誰もいない公園で彼女に自分の事情を説明した。

男の父親は資産家の宝石商だった。男は父の宝石店の一つを任されていた。父の力に頼っていると周りに思われるのを嫌っていた男は、己の力で店を大きくしようと躍起になって働いていた。父はそんな息子の事を誇りに思っているようだった。だが二年前、男の実に情けないミスで、二千万円の宝石類の入った赤黒いスーツケースを置き引きされてしまった。警察に連絡したが、結局スーツケースは見つからなかった。しかし、自分の情けないミスへの対処で父の

力を頼ってしまいたくはなく、また父からの期待のプレッシャーも受けていた男は、二千万円の損失を誰にも報告せず、借りられる分は借りられる所からこっそりと金を借り、会計帳簿も自分でつけて損失を誤魔化した。しかし借金は膨らみ、結果損失は徐々に拡大していった。そして二年が経ち、いよいよ自分の隠していた真実が明るみに出てしまうという窮地に男は立たされていた。

元少女は赤黒いスーツケースの詳細な特徴を聞き、それが自分の盗んだスーツケースと完璧に符合する事がわかった。ざわめくような罪悪感に駆られた元少女は、「金を工面できる当てがあるから二日待って」と男に言い残し、急いでスーツケースを埋めた場所へ向かった。だが、長年野ざらしだったはずのその土地には、家が建っていた。スーツケースの存在を家の人間に伝えてそれを掘り返してもらう事など、元少女にはできるはずも無い。その行為は自分の罪を暴露してしまう事になるからだ。元少女は気が狂ったように家の周りを歩きまわったが、どんなに頑張っても赤黒いスーツケースを取り戻すのは不可能に思えた。焦りと絶望に包まれた元少女がふと気付くと、家の玄関前で三、四歳くらいの子どもが不思議そうに自分を見ていた。この家の子どもに親を呼ばれたらまずい。そう判断した元少女は、仕方なくその場をあとにするしかなかった。

元少女は男に会い、金は用意できなかったと伝えた。男は、「大丈夫ありがとう」と力の無い声で言った。罪悪感に押し潰されそうになった元少女は男に提案した。父親の店から金を盗もう、誰かが罪を被らなきゃいけないのならあなたで無くても良いはずだ、あなたなら盗む事が出来る、と。男は彼女の提案に驚きたじろいた。元少女は「バレ無ければそれは罪じゃ無い」と冷静な眼差しを男に向けて言った。男は一瞬考えるそぶりを見せたが、すぐに元少女の提案を却下した。しかし元少女はしつこく、それでいて丁寧に何度も、様々な表現で同じ内容の提案をし、綿密な計画も提示した。優しく、馴染ませるようにゆっくりと、彼女は男の脳に提案を沁みこませた。漆塗り職人の丹念な仕事のように綿密に。

追い込まれ、疲弊し、やつれきった男はやがて、元少女の提案をついに飲み込んだ。元少女の計画では、男は信頼している人間を一人、罠に嵌めなければならなかった。そして、計画は実行され、男は無事に損失を取り戻した。罠に嵌められた人間は、責任を追及されて会社を辞めさせられた。その人間は実績もあり人望も厚い社員だった。男もよくその人間に助けられた事があった。その人間にはまだ小さな子どもが二人いると聞いていた。男は、元少女の前で泣いた。大きな声で泣いた。元少女は男の頭を胸で抱きしめて言った。

「あなたは、間違っていない」

それからしばらくして、男は首を吊って死んだ。その前日、元少女は男に言った。「どうして？どうしてまだ引きずっているの？あなたはもう損失なんか抱えてない。苦しまなくていい。私を見て。お願い。私を一人にしないでよ」男は言った。「君と出会えたのは運命的だ。でも、君は僕と一緒に居ちゃいけない。僕は、君を巻き込みたく無かったから今まで言って無かった事がある。最初に君と出会った時、僕は君に一目惚れをしていたんだ。実は君に会おうと、毎日君に出会った店に通ったりもしたんだ。君は、僕の希望の光だ。希望の光を、僕は消してしまうわけにはいかない」

元少女の沈黙の悪魔は、結果として愛する人間を殺した。元少女は、男の最期の言葉が優しい嘘だと分かっていた。店に毎日通ったのは自分であり、男は一ヶ月間、店に現れなかったからだ。一目惚れをしていたのは元少女の方だった。不確かな愛を掴むため、彼女は最後まで空回り続けていたのかもしれない。チェーンの外れた自転車のペダルを必死に漕ぐみたいに。彼女は彼を求め、唆し、自殺にまで追い込んでしまった。だが元少女には、男がどうして自殺をしたのかわからなかった。暴かれない罪ならば、黙っていればいいのに。自分が男に、己の罪を黙っていたように。

そこで元少女は気付いた。自分が愛よりも、沈黙を重く大切にしている事に。彼女はもはや、何よりも沈黙を重視していた。その時元少女は、自分が引き返せない所まで来てしまっているのを理解し

た。沈黙の悪魔が抱える罪を、誰かに自白する事はもはや出来ない。そして悪魔の成長はもう、自分では止められない。

元少女は失踪した。一人暮らしをしていた家からも、大学からも姿を消した。どこか知らぬ所で彼女は窃盗を繰り返し、そして窃盗の罪を隠し守るために、別の罪を重ねたりもした。彼女の沈黙の悪魔は着実に太っていった。そして、膨らんでいく沈黙の悪魔を、やはり誰かが見つける事は無かった。それは元少女が悪魔に与える餌の分量を間違えなかったからかもしれない。犯す罪は大きくなっていったが、それは少しずつ、本当に少しずつであり、彼女は決して餌を与える順番を間違えなかった。それは生来の生真面目さなのか、戒律を守る敬虔な宗教徒のように、彼女はその順序のルールを破らなかった。結果、沈黙の悪魔は彼女の丁寧な飼育に応え、強大に育っていった。

なだらかな山道を少しずつ少しずつ登っていけば、とてつもなく高い場所まで行ける。時が経ち、やがて彼女の罪は、人が来ては行けない所まで来てしまった。沈黙の悪魔は、すでに彼女が一人で抱えていられない程巨大に膨らんでいた。元少女にもついに限界が来ていた。そのままでは、彼女の精神や魂は悪魔に完全に乗っ取られ、彼女は人では無くなってしまう。まだ人でありたいとする元少女は、誰かにその悪魔を見つけてもらわなくてはならなかった。けれど、警察に捕まり罪を償う事は、今更彼女にはできなかった。どうしてこんな事になってしまったのか。誰かに言いたい。言えない。言いたい。言えない。

やつれた彼女が街を歩いていると、一軒のコーヒーショップが目に入った。その時彼女は、自分がもう何年もコーヒーを飲んでいなかった事に気が付いた。かつてカフェを持ちたいと願った自分がまだどこかにいるかと探したが、それはどこにも見当たらなかった。

そして更に時は流れ、今から七年前、ある日の夕方の事。今と同じ十二月の夕方だ。元少女はこの街に戻ってきた。沈黙の悪魔が生まれたこの街に。元少女は街の中をふらふらと歩きまわり、とある

探偵事務所の看板を見つけると、その事務所を訪れた。事務所の従業員のほとんどは出払っていたが、所長の探偵が一人だけそこに残っていた。元少女は、ちょうど今の私と同じように真っ赤なコートを着て、手提げ鞄を持っていた。席を勧める探偵の言葉を無視して、彼女は探偵に言った。

「沈黙の悪魔は存在する」

異様な空気を察した探偵は戸惑った。しかし、依頼内容が既に始まっていると考えたのか、探偵は、立っている自分のすぐ横の机に置いてあった録音機を操作し、元少女の言葉を録音し始めた。元少女は言う。

「録音するの？なるほど、探偵事務所に来る依頼人は、しばしば精神的に不安定だったり、複雑な内容の依頼をして来たりするものね。依頼人の言葉を録音しておかないと、後に依頼人とトラブルになる可能性もある。私はあなたにとってトラブルの元に見えているのかしら？」

言い訳をするように探偵は答える。

「いえ、別に、いつもしている事です。そういうわけじゃ」

元少女は口元にだけ笑みを浮かべて言う。

「全ての真実が、白日の下に曝される事はあるのか？恐がらなくていい。あなたに、ある少女の話をしようか」

そして、元少女は語り始めた。君が今聞いてきた話と同じ話を。元少女はそれを自分の話としてでは無く、ある『少女』の話として探偵に語った。そして話を語り終えると元少女は言った。

「思い返してみれば、全ては銀色の指輪から始まった。あの時、罪を告白しなかった事が全ての始まりだった。指輪騒動の時、少女には引き返すチャンスが何度もあった。店長とマリちゃんが休憩室の扉を開けた時、どうして少女はすぐに指輪を差し出さなかったのか。指輪を自分の指にはめてしまった後ろめたさもあったかもしれない。でも、あの時マリちゃんは言った。『ヨウコちゃんが見つけてたら直ぐ言うでしょ』。きっと少女を疑いの目から守るためにマリちゃ

んはその言葉を言った。そして店長も言った。『まあヨウコちゃんが持ってるわけないか』。店長とマリちゃんの中で、少女は真面目な子だった。そんな真面目な子が指輪を隠しているはずは無いと彼らは勝手に決めつけた。もちろん、彼らには何の罪も無い。ただ、周りに真面目だと思われている事が、罪を告白しようとする少女の決断を鈍らせていたというのはおそらくあった。誰だって、好きな人達の前では、美しく望まれる自分でいたいはずでしょう?きっと、人は油断するといつの間にか、周りが思っているように発言し行動してしまう。裏にある自分に蓋をして。そしてもう一度言うわ。店長とマリちゃんに罪は無い。彼らはただ、罪無き加害者になってしまっただけの事。宝石商が自分の息子に期待を寄せるのが罪でないのと同じように。おそらく、世の中の罪無き加害者の多くは、自分が加害者であるとは気付いていないものかもしれない。なぜなら被害者もまた、自分が被害者である事に気付いていないのだから。何か事件が起こるまでは」

元少女はそこで、一拍の間を置いて再び喋りだした。

「マルジュの休憩室を飛び出した少女は最初、きちんと指輪をカップルに返すつもりになっていた。でも、指輪を捜すカップルを見た時、少女は打算を働かせた。指輪を隠し持っている事実を明かさずに、何とかそれをカップルの元へと戻す方法を探ろうとした。その打算が、誠実であろうとする少女の気持ちを底に押し込めた。そして少女は指輪を返すきっかけを失った。打算を働かせる脳など持ち合わせていたばかりに、少女は罪を告白できなかった。この世界ではおそらく、強かな人間ほど聖人になるのは難しい。強かな聖人が存在するのかどうか知らないけど」

元少女は右手に提げた鞄を左手に持ち替えた。そう、ちょうど今私がしたように。そして話を続けた。

「そして償われないのなら、罪は決して一つでは終わらない。結局少女は、マリちゃんの手をゴミで汚れさせ、指輪を無くした女を陰で侮辱し、トモちゃんを罪に巻き込んだ。トモちゃんを巻き込んだ

のは、少女が、罪を犯した自分自身から逃げようとしていた自己逃亡者だったからね。いずれにせよ、罪は決して単独では存在しない。そしてこの辺りから、少女の沈黙の悪魔はきっと徐々に膨らみ始めていた」

元少女は一度、こく、と唾を飲む。こういう風に。

「さて、どうして私がこんな話をしているのかあなたはずっと疑問に思っているかしら？長い前置きだったけど、それじゃあ本題に入ろうか」

元少女は一歩前に進み出た。今私がしたように。元少女は言葉を続ける。

「指輪騒動から十年が経ち、今、彼女の沈黙の悪魔は彼女の許容の限界を超えた。元少女は、沈黙の悪魔を一人では抱えきれなくなってしまった。誰かに自分の抱える真実を伝え、沈黙の悪魔を誰かと共有しなくてはならない。けれども沈黙の悪魔は警察に捕まる事を許さない。罪を償わずに、誰かに真実を伝える事はできないのか？彼女は考え、一つの名案を思いつく」

そして元少女は自分の手に持つ鞄に一度目を遣った。わかるかい？今私がしたようにだ。そして元少女と向き合っている探偵も鞄に目を遣った。今君がしたように。元少女は語り続ける。

「彼女の結論はこう。自分の抱える真実を誰かに告白する。しかしそのままでは、真実を知った相手が警察に彼女の事を密告してしまうかもしれない。だからそうなる前に、真実を知った相手には永遠に喋れ無くなってもらう事にする。つまり、真実を伝えた直後に、彼女はその相手を手にかける」

探偵は元少女の目を見つめた。そう、今君が私にしているように。元少女は更に言う。

「しかし、真実を知った相手を殺してしまえば、また自分は一人で真実を抱える事になる。その問題を解消するためには、また別の誰かにも真実を伝える必要がある。そしてそうなれば、その相手も殺す必要が出て来る。誰かに真実を告白して、告白した相手を殺す。

それを繰り返さなければならないという結論に、元少女は至った。
そして思い立った彼女は、鞄の中にナイフを入れ、赤いコートを着た。返り血が付いても目立たない赤いコートを。それから彼女は、真実を伝え、殺すべき相手を探した。まず彼女の目に入ってきたのは、探偵事務所の看板。探偵さんなら自分の話を聞いてくれるだろうと彼女は思った。真実を知ってもらい死んでもらう相手の一人目を、彼女は探偵に決めた」

そう、今君がしたように、その時その探偵も、目の前の相手が持つ鞄に目を遣った。おや？君、大丈夫かい？足が震えているよ。声が出ないのかい？動けないのかい？その時の探偵も、君と同じようにしていたよ。

元少女は探偵に一歩近づいた。右足からこうやって。それから左手に持つ自分の鞄のファスナーに、右手の指をかけた。こういう風に。そしてその指が、鞄のファスナーを開けようとした。

バンッ。

突然、大きな音が鳴った。それは、探偵が直ぐ横の机に自分の足をぶつけた音だった。その勢いで、机の上に置かれていたコーヒーカップは倒れ、中に入っていたコーヒーが机の上や床に垂れ流れた。探偵はしかしそんな事には気を止めず、元少女の挙動を見張り続けた。元少女は垂れ流れるコーヒーに目を遣った。彼女はそこで動かなくなった。するとしばらくして、彼女は静かな声で言った。

「冗談よ」

沈黙が流れた。予断を許さない沈黙。元少女は言葉を続ける。

「びっくりさせてごめんなさいね。冗談よ。私がその『少女』だと思った？ふふ、全て作り話よ。鞄にナイフなんて入ってない。この赤いコートは、クリスマスが近いから着ているだけ」

元少女はニヤリと笑い、腕を開いてコートを広げて見せた。

「あら、信じてない？いやそもそも、仮にもし私がその『少女』だとしても、警察に捕まらないためには、死ぬのはあなたでなくてもいい」

元少女は窓の方へ目を移した。

「それに、雪が、降り出して来た。雪が降るなら、殺人はしない方がいい。何故かわかる？雪が降り続ければ、路上の全ての痕跡は消え去ってくれる。けれど、それが止んだ途端、雪の上には痕跡が残ってしまう。血痕や足跡がね。殺人を犯す者にとって、雪は有利か不利かどちらに転ぶか分からない。雪は運命を分けるもの。自分がまだ人間でいたいなら、そんな雪が降る時には、せめて殺人はしない方がいい」

探偵は元少女への警戒を解かないまま、窓の外にちらりと目を遣った。窓の外に、白い雪の粒が見える。

「探偵さん、私の暇つぶしに付き合ってくれてありがとう」

言って、元少女は鞄の中から紙とペンを取り出すと、そこに何かを書き、その紙を近くの机の上に置いた。そして彼女は探偵事務所から出て行った。後に残されたのは、彼女が何かを書き残した紙と、まだ机から僅かに零れ落ちているコーヒーと、そして私だけだった。

ああそうだよ。私は、その時の探偵だよ。君に語った元少女の話は、全てその時探偵事務所に訪れた本人から聞いた話だ。本人だ。彼女の語った話は、作り話では無い。

何故私が作り話では無いと思うのか。理由の一つは、彼女が書き残していった紙にある。その紙には、携帯電話の番号が書かれてあった。私は紙に書かれた番号に電話をかけてみた。しかし電話は繋がらなかった。その電話番号を書いた女の言っていた一つの事が、私は気になった。『警察に捕まらないためには、死ぬのはあなたでなくてもいい』。その言葉の意味を考え、私は一つの仮説を立てた。『死ぬのはあなたでなくてもいい』とはつまり、警察に捕まらないためには、【自分が死ねばいい】という意味では無いか。

そして次の日も、その次の日も、私がいくらその番号に発信したところで、誰かが電話に出る事は無かった。

そして彼女が探偵事務所を訪れてから四日後。警察から私に電話があった。そこで私は、シバウチヨウコという女性が数日前に死亡

したという事を聞かされた。シバウチヨウコは『少女』の名前だ。シバウチヨウコは自宅アパートで首を吊って自殺したらしい。毎朝、アパートの管理人に挨拶をするシバウチヨウコが突然部屋から出てこなくなったのを、管理人が不信に思って警察に通報したらしい。警察は、シバウチヨウコの身元を確認しようとする過程で、彼女が死亡したと思われる日から毎日、彼女の携帯電話に着信がある事を知った。私からの着信だ。そこで刑事は私に連絡をしたわけだ。身体的特徴、服装などが私の記憶と一致して、私はそこで、シバウチヨウコが探偵事務所に来た女である事を確信した。私はシバウチヨウコが事務所に来た事を刑事に話した。そして、彼女との会話を教える代わりに死亡時の状況を詳しく教えてくれと刑事に交渉した。まあ結局、私の方からは刑事に真相を伝える事は無く、シバウチヨウコは何も語らなかったと伝えたが。

だが刑事の方は親切に教えてくれた。刑事の話によると、シバウチヨウコは、頑丈なロープで首を吊っていたらしい。私の事務所に来た日の夜の事だ。そんなロープをしっかりと用意していた事から、私の事務所に来る前すでに、彼女は自殺の準備をしていたのだろう。ただ一方で、首を吊ったシバウチヨウコの部屋のテーブルに置かれていた手提げ鞄の中からは、サバイバルナイフが見つかったという。もしかしたら彼女は、私を殺すか、自分が死ぬか、ぎりぎりまで迷っていたのかもしれない。私があの時コーヒーを零さなかったら、天が雪を降らせなかったら、結果は変わっていたのかもしれない。そして、テーブルに置かれた鞄の脇には、カップに口をつけられた痕跡の無い一杯のコーヒーが置かれていたらしい。死ぬ直前に彼女は、自分でコーヒーを淹れたのだろう。一体どのような意図でそれは淹れられたのか？その時シバウチヨウコはコーヒーを飲むつもりだったのか？それとも別の思いがあったのか？想像したところで答えは出ないが、シバウチヨウコのコーヒーに対する思いは、きっと些細なものでは無いはずだろう。

シバウチヨウコはおそらく私に、自分の話が本当の話だと信じて

欲しかった。そして自分の最期を知って欲しかった。だから電話番号を私のところに置いて行ったのだと思う。住所を書かなかったのは、自殺を止められる可能性があるからだろう。

さて。シバウチヨウコの話はこれで終わりだが、君は、私が何故今まで君に長々とシバウチヨウコの話をしたのだと思う？

理由は二つある。一つ目の理由は、私にはシバウチヨウコの話を誰かに語る責任があると思ったからだ。シバウチヨウコは、私に己の真実を託して死んだ。そのせいで、私はシバウチヨウコという人間を、自分の中で消化しなくてはならなくなった。私は何度も、録音していたシバウチヨウコの話を再生して聞いた。丸暗記できるくらいにね。彼女は『全て銀色の指輪から始まった』と言っていた。きっと、小さな落し物を盗める人間は、いずれ人を殺す事だって出来る。沈黙の悪魔が存在する限り、その落し物は指輪だろうが財布だろうが変わらない。私は、その事を誰かに、とりわけ罪を犯してしまう誰かに伝えるべきなのかもしれないと思った。そうすれば、シバウチヨウコの託した思いから、私は少しずつ解放されるような気がしたからだ。私には、シバウチヨウコの話をありありと、出来るだけ強烈に誰かに伝える必要があった。君はその誰かだ。先ほどは少し怖がらせすぎたかもしれないが、悪ふざけが過ぎると思われたかもしれないが、私にはそれが必要な事だった。ともかく、それが一つ目の理由だ。

ただ一応一つ断っておくが、私は別に、君の行動選択に口を挟みたいわけではない。拾った財布の行方を沈黙のうちに消し去るのか、そうしないのかは君が決める事だ。私が決める事ではない。

私にだって、普段から沈黙している事は沢山ある。例えば、私は良く献血をしに行く。慈愛に溢れた善人の顔をして献血をする。私はＡＢ型だ。ＡＢ型は大体いつも血液が不足しているので、献血ルームのスタッフも私が来ると喜ぶ。しかし、私が献血をするのは別に慈善的な理由からじゃない。私は、自分の血液を世の中に広めたいだけだ。子どものできない私にとって献血は、何とか自分の遺伝

子を世の中に広めるための手段に過ぎないんだよ。だけどそんな事は、私は普段沈黙している。

他にも私は、人を騙すための沈黙をした事もある。今でこそ私は、自分は男性が好きだとはっきりと思えるが、私は学生時代、女性に交際を求められた事が何度かあり、その度に私は自分の気持ちも確かめずに、言われるがまま相手の女性と付き合ったりした。自分はやはり女性では無く男性が好きだと確信したのは十数年前、ちょうどシバウチヨウコの指輪騒動が起きた辺りからだ。しかしそれまでは、自分で違和感を抱いていたのにも関わらず、私は女性と付き合っていた。そして私は結局、数人の女性の気持ちを裏切った。まあ誰とも肉体的な関係を持つような事は無かったが、別れ際に関しても、私は卑怯な事に、自分からはっきりと相手に意志を伝えたりはせず、徐々に相手に嫌われるように仕向けていた。

もちろん、私だけで無く、誰も皆、心の中に沈黙している事はあるのだろう。いずれにせよ、もし罪を餌に成長する沈黙の悪魔というものが存在するのなら、そいつが大きくなってからでは、その人間は悪魔の誘惑に勝てなくなってしまうのだろう。

君は財布を拾った。拾われた財布の行方を、君も沈黙する事が出来る。ただ、それがどんな財布であれ、拾われた財布は拾った人間にその責任を委ねる。君にはもう既に、その手に持たれた財布に対して責任が発生している。その財布を警察に届けるのか、財布に入っている金でコーヒーを飲むのか、首を吊れるロープを買うのか、君が自分でどうするのか決断しなくてはならない。とにかく、私は君の行動に口出しはしない。

さて、私はまだ、君にシバウチヨウコの話をした理由の二つ目を言っていなかったね。いや、実は二つ目というのは正確な表現では無いのかもしれない。なぜならこちらの方が、私にとっては重要な、真の理由だからだ。

私が何故シバウチヨウコの話をして来たのか?その本当の理由は、私自らの贖罪のためだ。さきほど私が君に『話を聞く資格がある』

と言ったのは、路地裏で財布の中身をこっそりと確認する君には、私の『罪』について聞く資格があると思ったからだ。そういう人間を、私は探していた。

私は今ここで、私の罪を君に伝えよう。シバウチヨウコが私にしたように。そのために私は、シバウチヨウコの話をこれまで君にしてきた。

君は、スモールワールド現象という言葉を聞いた事があるかい？世界中の人々は意外と簡単に繋がっているという意味合いの現象の事だ。過去実際に学者達がそれについて実験もしている。自分の知り合い、更にその知り合い、更にその知り合い…と繋いでいけば、およそたった六人目には、世界中の人と自分は繋がっているという実験結果が出ているそうだ。『六次の隔たり』などと呼ばれているらしいが、とにかく世界は本当に意外と狭いものなのかもしれない。

シバウチヨウコが探偵事務所から帰る時、私は彼女を引き止めなかった。そこで引き止めていれば、彼女は死なずに済んだのかもしれない。だが、明らかに尋常ではない様子の彼女を引き止める事は、その時私には出来なかった。

シバウチヨウコの話が本当の話であるだろうと判断した理由は、彼女が書き残していった紙によると先ほど私は言ったが、実はそれだけではない。シバウチヨウコが探偵事務所にいる時に、本当の事を言えば私は既に、彼女の話の信憑性を疑っていなかった。

君は、私に声をかけられる前、自分のその手に持った財布の中身を確認して、『落とす奴が悪いんだ』と言っていたね。確かに、そうかもしれない。

あの時、私が指輪をマルジュに置き忘れなければ、シバウチヨウコが死ぬ事も無かったかもしれないのだから。

女は少年の顔を真っ直ぐに見て言う。

「私は、銀色の指輪の所有者だ」

無防備な、しかし意志を持った目で、女は続ける。
「シバウチヨウコの話を聞いている時、私は震えたよ。おそらく彼女は、私が指輪の所有者だとは気付いていなかっただろう。十七年前という大昔に比べると私は随分劇的に雰囲気も見た目も変わったからね。私の方も彼女の話を聞くまで、目の前の女があの時マルジュに居た店員だとは気付かなかった。何にせよ、私は結局最後まで、自分が指輪騒動の当事者である事を彼女に明かさなかった。私は動けなかった。事務所を立ち去り、死へと向かう彼女を引き止める事はできなかった。そしてシバウチヨウコは、指輪の真相を知らずに死んだ。彼女は、【自分だけが秘密を持っている】と思って死んだ」
女は、路地裏の入り口へと後ずさりしていった。
「人は難しい。周りの人間が知らないような事を知っていると、自分は全てを理解しているように感じてしまいがちだが、果たして本当はどれ程の事を知っているのだろう。そして、私の罪の告白は、まだ終わっていない。私の罪は、本当の罪は、指輪騒動の時、沈黙していた事だ。私は昔から、指輪をしていない方の手でコーヒーを飲む。食器を傷つけないためだ」
路地裏の入り口で、女は動きを止めた。
「全ての真実が、白日の下に曝される事はあるのか？私は指輪の真相を、君に委ねる。真相を暴くのも、暴かないのも、君の自由だ。ここまで話してみて思うよ。決意を持ってここへ来て良かった」
言い終わると女は踵を返し、路地裏から出て行った。少年の視界から、女はあっさりと姿を消した。

4　少年の推理

女が立ち去り、残された少年は呆然と路地裏に立ち尽くした。やがて少年は、ゆっくりと視線を足元に落とした。そして背後に回した手にずっと掴んでいた財布を、少年は目の前に持ってきた。握りしめた両手からしみ出た大量の汗は、存分に財布に張り付いていた。それは飴のように粘り、少年の手の平と財布の革の双方を溶かし、くっ付けようとしていた。沈黙の悪魔。全身に走る怖気を身震いに変え、少年は慌てて財布を手から振るい落とした。

少年は地面に膝をつき、それから尻をつけた。体は異常なほど消耗していた。体内の全ての機能が、残された僅かな力で虚しく空転しているようだった。少年はゆっくりと大きな呼吸をする。足や腕や背中の筋肉が非常な緊張をしていた事を、少年はようやく意識する事が出来た。

今の女は何だったのか。少年は頭の中で、目の前で起きた出来事について考えた。赤いコートを着た背の高い長髪の女。その女の話。話の途中、女がこちらへ近づいてきた事を思い出し、少年は戦慄した。まだその辺に女が潜んでいるかもしれないと思った少年は、路地裏の入り口まで這って行き、目をぎらつかせて外の様子を窺った。しかし、遠くに人は見えるが、近くに人の気配は無かった。

徐々に落ち着きを取り戻してきた少年は、この路地裏で起こった出来事について分析を始めた。そして、女が何者か、女が現れたのは偶然か、女の目的は何か、それらを考える手掛かりは、女の話以外に無いと少年は判断した。そこで少年は、一旦女の話を全て信じたとして、推論を立てる事にした。

女は立ち去る直前、『指輪の真相を、君に委ねる。真相を暴くのも、暴かないのも、君の自由だ』と言った。真相とは何か？女の話には何かまだ足りない部分があるのか？

少年は考える。自分の罪を告白するために、女はシバウチヨウコ

の話をした。女の本当の罪は、『指輪騒動の時、沈黙していた事』らしいが、女は何を沈黙したのか。『私は昔から、指輪をしていない方の手でコーヒーを飲む』と女は言った。『食器を傷つけないため』との事だが、何故最後急に女はそれを言ったのか。それを今まで沈黙していたのか？マルジュに居た時も、指輪をしていない方の手で女はコーヒーを飲んだのか？だから何だと言うのだ？

そうではない、と少年はそこで気付いた。マルジュに居た時、女は指輪を外していた。だからこそ女は指輪をマルジュに置き忘れたはずだ。『私は昔から、指輪をしていない方の手でコーヒーを飲む。食器を傷つけないためだ』。それは言い換えるとつまり、【自分は普段コーヒーを飲む時は指輪を外さない人間だ】という事だ。普段からコーヒーを飲む時には指輪を外す人間ならば、食器を傷つけないためにどちらの手でコーヒーを飲むかなど考えない。しかし、だとするとそれなら何故、マルジュで女は指輪を外したのか。何か特別な理由があったのか。

女は自分に何を伝えようとしているのかと、少年は考える。女は言った。『私の罪を君に伝えよう。シバウチヨウコが私にしたように』。シバウチヨウコは、女に電話番号の紙を残した。もしかして女も自分に何かを残しているのか？真相に繋がる何かを。しかし、女は路地裏に何も残していったりはしなかった。何も。何も？

少年は地面に落とした長財布に目を遣った。『拾われた財布は拾った人間にその責任を委ねる』。少年は財布を拾い上げ、中を開いた。そこには一万円札が入っている。『山下正雄』という名前だけが見える免許証も入っている。山下正雄。それは誰だと少年は考える。少年はゆっくりとその免許証を取り出し、そして愕然とした。免許証の写真の顔は、先ほど少年の前に立っていた女の顔だ。少年は思わず財布と免許証から指を離し、それらを再び地面に落とした。

少年は頭の中を整理する。

目の前にあるのは女の財布だった。そして、女の名前は正雄。それは男の名前。ともかく、女はここに自分の財布を残していった。

それによって何かを伝えるために。
女はわざと、この財布を表通りの道端に置いたのだと、少年は考えた。そもそも、自分が路地裏に入った事がどうして女に気付かれたのか、少年には不思議だった。ダウンに財布を隠す時、自分は辺りを見回し、周りに人の気配が無い事を一応確認したはずなのに。女はずっと陰で自分を尾行していたという事か。女は自身の財布を道端に置き、それを盗む人間を待っていた。女は探偵と言っていた。そのくらいやっていてもおかしくはない。
財布をこっそり開く人間を探していたと女は言っていた。その人間には話を聞く資格があると。その人間とは、罪を犯す気持ちの分かる人間という意味ではなく、財布の中身を覗き見て、真実に辿りつく可能性のある人間という意味だったのかもしれない。真実。真実は一体何か？女は正雄。正雄の性別は男？
正雄の話を、少年はじっくりと思い返さなければならなかった。
正雄は献血の話をした時に、献血をする理由は慈善的なものでは無いと言った。それを聞いた瞬間、人の役に立とうとする己に酔いたいから献血をする、というような事をおそらく正雄は言いたいのだろうと少年は思った。というのも、少年自身が数ヶ月前に献血をした時、そのような気持ちを持ったからだ。この国では、献血行為は十六歳以上で無いと許されていない。その年齢まで禁止されていただけに、少年は十六歳になった今年の八月、せっかくだからと献血を行った。少年の血液型は、正雄のように稀少なＡＢ型では無く比較的人口の多いＯ型ではあったが、献血ルームに行った時には、少年はスタッフから丁寧な感謝を述べられた。それは快感だった。その時、自分が己の善行に酔っていたのを少年は覚えている。裏では財布を盗むような人間であるのにも関わらず。
しかし、正雄が献血をする理由として述べたものは少年の予想とは違っていた。正雄は献血の理由を、『子どものできない私』が遺伝子を世に広めるためと言っていた。『子どものできない』とはどういう意味か。そして正雄はそのあと、自身の恋愛事情について語

り、『今でこそ私は、自分は男性が好きだとはっきりと思える』と言った。

男が好き、そして子どもが出来ないというのは、要するに正雄も男だという事を示したかったのだろうと少年は思う。正雄は、男。

しかしそれならば、正雄の外見は、いつから女に変わり、いつまで男だったのだろうか?指輪騒動の時に指輪を無くしたカップル。その時、指輪を無くしたのは女の方であり、指輪の所有者は正雄であると正雄自身が言っていたから、指輪騒動の時、正雄は既に外見的には女になっていたという事か。

そこで少年は首を傾げた。正雄は指輪騒動の時、本当に女の方だったのか?指輪騒動の時、女は指輪を捜してはいたが、それが【自分の】指輪だと一言でも言っただろうか。女がシバウチヨウコに最初話しかけたとき、確か女は、『あなたは指輪を見てないの?』と言っていた。【自分の】指輪とは言っていなかった。

そして少年は、指輪騒動の話の中で強く印象に残っている部分を思い出した。シバウチヨウコが女に追い詰められていく部分だ。

女の細長い人差し指が、シバウチヨウコのエプロンのポケットを差した。その時女は『自分が望んでいなくても、予期せぬものがそこに入る事だってある』と言っていた。その時も女は自分の指輪という言葉は使っていない。

指輪は、シバウチヨウコの指のサイズよりも大きかった。正雄がしていたのは男物だったと考えれば当然かもしれない。正雄が大柄である事も、現に少年は本人を目の前にして知っている。しかし、正雄は、シバウチヨウコのポケットを差した女の指を、【細長い】人差し指と確かにそう表現していた。【細長い】人差し指にシバウチヨウコは腹を貫かれたような気がした、と。それに、探偵事務所でシバウチヨウコと会った時、指輪の所有者が正雄だとシバウチヨウコは恐らく気付いていなかったと、正雄は言っていた。その理由を『十七年前という大昔に比べると、私は随分劇的に雰囲気も見た目も変わったからね』と言った。それはつまり、指輪騒動の時、正

雄は女の方では無く、男の方だったからという事ではないか？
　少年の推理には確証こそ無かったが、そう考えた方が自然であると少年は徐々に気付いていった。
　もし、そうだと考えると、指輪を無くした正雄は男の方であり、指輪を必死に捜していた女は、彼氏（正雄）の指輪を捜していたという事になる。正雄は自分の指輪を無くした事について、『また俺がもう一回同じものを買う』と言った。その発言に対して女は怒った。怒ったというのはつまり、それが女のあげたプレゼントだったからだろう。あげたものでも無ければそこまで怒る理由は無い。しかし、指輪が彼女からのプレゼントだとするならば、指輪捜索における正雄のやる気の無さには酷いものがある。何故正雄は、彼女からのプレゼントの指輪を捜すのに気合いを入れなかったのか。
　正雄は自分に何かヒントを残しているはずだと考え、少年は正雄の言葉を更に思い起こした。正雄は、『私は自分の気持ちも確かめずに、言われるがまま相手の女性と付き合ったりしていた』『自分はやはり女性では無く男性が好きだと確信したのは十数年前、ちょうどシバウチヨウコの指輪騒動が起きた辺りからだ』『別れ際に関しても、私は卑怯な事に、自分からはっきりと相手に意志を伝えたりはせず、徐々に相手に嫌われるように仕向けていた』と言っていた。つまり正雄は当時、女性に人気のある男だったようだ。そして指輪騒動の時も、正雄は女性と付き合っていた。しかし正雄はその時、自分は男が好きである事に気付き始め、付き合っていたその女性と別れようとしていた。ただ、完全な悪者になる事を嫌った正雄は、別れる意志をはっきり相手に伝える事はせず、とぼけた男を演出して相手に嫌われ振られるように仕向けた。例えば、プレゼントとして彼女に貰った指輪を無くしても、その捜索に力を入れないというような態度をとって。
　正雄は自分の彼女に対し、自分の本心、その企みを沈黙していた。正雄は彼女の気持ちを弄んだ。『指輪騒動の時、沈黙していた』というのはその事を示していたのだろうか。それが正雄の罪なのだろ

うか。

そうだとするならば、マルジュで正雄は、【わざと指輪を無くすつもりだった】。正雄はわざわざマルジュに指輪を置き忘れた。彼女からのプレゼントを大事にしない、酷い男を演出するために。それが、普段コーヒーを飲む時に指輪を外さない人間が、指輪を外した理由。正雄はそれが言いたかったのだろう。指輪を探しにマルジュへ戻ってきたのは、彼女に指輪をしていないのを指摘され、嫌々引き連れられて来たという事だろう。そう考えれば辻褄がつく。

もしかして、正雄はシバウチヨウコの怪しい左手にも気付いていたのかもしれない。エプロンのポケットを叩きながら、頑なに開こうとしなかったシバウチヨウコの怪しい左手。シバウチヨウコは自分でも、それが明らかに怪しい行動だと認めていた。シバウチヨウコの左手が何かを、おそらく銀色の指輪を握っているのではと、その時正雄は気付いていたのかもしれない。

付き合っていた女性と別れる時には、『徐々に相手に嫌われるように仕向けていた』と正雄は言っていた。しかしそう言っていたのに、指輪騒動の時に彼女に言った『指輪なら、また買えばいい。また俺がもう一回同じものを買うよ』というのは、徐々に嫌われるための言葉としてはあまりにも決定的で分かり易い。なぜ正雄はそのように分かり易い表現をしなくてはならなかったのか。それはきっとその時正雄が、自分の彼女からのプレゼントを紛失した注意不足な男、という落ち度を保て無くなってしまいそうだったからでは無いだろうか。なぜなら、正雄はシバウチヨウコの怪しい左手に気付いてしまっていたから。そのままでは指輪を無くす計画が破綻する事を悟った正雄は仕方なく、決定的に彼女に嫌われる表現を使った。そして正雄は何とか思惑通り、彼女に嫌われる事が出来た。おそらくそれが、銀色の指輪の真相だ。

だとしたら、指輪騒動の時、シバウチヨウコの沈黙の悪魔を光に曝して打ち倒すのが正雄には可能だったという事になる。しかし正雄は、自分の茶番を完成させるために、その選択はできなかった。

自分の指輪を誰かが盗み持っているのを咎めない事は、別に罪では無い。ただそれが結果的に、シバウチヨウコの沈黙の悪魔を守り育てる事に繋がった。

正雄は、自分の彼女に嫌われるために打算を働かせた。プレゼントをわざと紛失させて。そうして自分の彼女を騙し、傷つけた。

そして、正雄が指輪を投げ捨てたりせずに、マルジュのテーブルにそっと置いていったのは、せめてもの良心の呵責があったからなのかもしれないが、しかし結果としてそれはただの無責任な行為にしかならなかった。結局その行為が、指輪騒動を生んだ。シバウチヨウコを巻き込んで。それはシバウチヨウコが、クラスメートのトモちゃんを指輪騒動に巻き込んだのと同じような行為だ。

シバウチヨウコは探偵事務所で言っていた。『罪は決して単独では存在しない』。シバウチヨウコの言葉を更に借りるなら、正雄は『罪無き加害者』であり、『強かな聖人』には成れず、偽善的な『自己逃亡者』であったのだろう。

しかし少年は思った。この自分だって、財布を盗んだ時、持ち主の情報をなるべく頭に入れないようにした、と。被害者の顔を知らなければ悪人になれるというのは、つまりは少年もまた、少しでも罪の意識を軽くしようとする自己逃亡者である事に変わりは無かった。

正雄は贖罪と言い、自らの沈黙を破った。シバウチヨウコのように真相に辿り着くための手掛かりを残して。これから正雄はどうするのだろう。まさか自殺をするわけでは無いだろう。シバウチヨウコと違って、正雄は免許証に自分の住所を残している。

少年は財布に目を落とす。それにしても自分は何故こんなに厄介な財布を拾ってしまったのかと考える。運命という言葉でそれを片付けるのを、少年は嫌った。運命などは幻想であり、そんなものに縛られたくは無いと思った。もしかしたらこの免許証に写っている正雄という人間の話は全て嘘なのかも知れない。シバウチヨウコなどという人間は存在しないのかも知れない。

だがしかし、とりあえず現実として、正雄の言う通りこの財布をどうするかの責任は、今少年に委ねられていた。正雄は自分にこの財布をどうして欲しいのかを少年は考えた。

警察に届けてしまったら、結局罪の真相は暴かれなかったと正雄に思われるかもしれないがそれでも良いのか？財布は正雄の家に直接届けた方が良いのか？それとも中に入っている一万円を使ってしまうべきなのか？

考えれば考えるほど、自分が何をするべきなのか少年は決断できなくなっていった。そして少年は、自分が我儘である事に気が付いた。運命に翻弄されるのには抵抗するくせに、いざ自分で決めるとなると何も選べない。それが、これまで特に不自由の無い家庭環境の中で、何となく流れに身を任せて生きてきた人間の形成する脆い器なのかと、少年は自嘲した。

【何も選ばない】という事は出来ないのか。少年は思案する。そして、財布を路地裏に置いて立ち去る事を少年は考えた。正雄がまた後でここを見に来るような気がする、と根拠無く思い込んだ。

結局、少年は自分が嫌っているはずの運命に全てを任せた。免許証を財布にそっと挟み、それを正雄が先ほどまで立っていた場所に置き、少年は路地裏を後にする事にした。

5　一杯のコーヒー

路地裏を出ると、通りには街灯が灯り始めていた。街灯の淡い光は、ブラシで擦り付けたみたいに冷たい空気の中に滲んでいた。少年はゆっくりと家へ向かって歩き始めた。足は重い。体の重心は、もはや地面の下にあるようだった。

突如、少年の尻に、とんっと何かが当たった。振り返るとそこには、小学生になったかどうかばかりの、小さな少女が立っていた。肩の下まで伸ばした栗色の髪が、オフホワイトのフレアコートの襟に緩やかに乗っている。その髪の内側には、膨らみのある白い頬が、小さく行儀良く収まっていた。少女の大きな丸い目は黒く潤み、唇は雨上がりのスイートピーのように瑞々しく鮮やかなピンク色だった。

少女は、先ほどまで少年が持っていた長財布を右手に持ち、それを少年に差し出していた。

「これ、おとした？」

少女は少年の目を見て言った。

「あ…いや」

慌てて言葉を探しながら、少年は少女に適当な説明をしようとした。少女の右手には長財布が持たれている。そして左手には、缶コーヒーが握られていた。良く見ると、それは無糖のブラックコーヒーだった。少年は少女の顔を見た。少女はくりくりとした黒い目で少年の瞳を見上げていた。

「君…名前は？」

気付くと少年は聞いていた。

「コノハ」

少女は笑って答えた。

「そう…」

聞いてしまった後に、自分は何故名前を聞いたのだろうと少年は

思う。
「これ」
少女は言って、財布に一瞬目を移し、再び少年の瞳を覗きこむ。
「ああ、これ。…僕のじゃない」
「え、ちがうの？」
少女は目を瞬かせ、驚きを表した。少年は路地裏に目を移した。
もしかすると、自分が財布を地面に置くところをこの少女は見ていたのかもしれない。少年が辺りを見回すと、少し離れた所に三十代くらいの男女が立ち並んでこちらを見ていた。おそらくこの少女の両親だろうと少年は思った。
「じゃあ、こうばんにとどける」
少女は言った。そして財布を少年の腹に押し当てた。
「え、僕が？」
少年は思わず戸惑った。その時、財布から正雄の免許証が飛び出てきた。免許証を財布のポケットにしっかり入れずに、ただ財布に挟んでいただけだからだろう。免許証は地面に落ち、正雄の写真が上を向いた。少女はしゃがみ、財布を地面に置いた。そしてそのままその免許証を手に取ろうとした。しかしそれよりも早く、少年は急いで免許証を取り上げた。何故だかわからないが、少年は正雄の免許証を少女に見せてはいけない気がした。
「それなあに？」
少女は少年が取り上げた免許証の裏面を見上げながら言った。
「免許証だよ。車の」
少年は簡潔に返答した。少女は免許証の裏面を見つめる。そこに書いてある文字を見つめる。免許証の裏面に、正雄は文字を書き残していた。
免許証の裏の備考欄に『シバウチ　ヨウコ、ヤツナミ　ユキ、両名に謝罪』と正雄は書いていた。それは真実を暴こうとする者への、正雄からのメッセージだった。指輪騒動当時、正雄がカップルの男の方であった事を示すためのメッセージ。真実を暴こうとする者が

それを見たら、その者は次のように推理するだろうと正雄は考えていた。《シバウチヨウコというのは元少女の名前だ。ではヤツナミユキとは誰だ?指輪騒動において正雄がシバウチヨウコと並べて謝罪を述べるべき相手、それは当時正雄が付き合っていた恋人くらいしか考えられない。ユキというのは一般的には女性に多い名前だ。そして謝罪をしなければならないという事は、輪騒動当時、やはり正雄はカップルの男の方だったのだろう。》

免許証の裏面を見れば、少年は自分の推理の正しさを裏付ける事が出来るだろう。しかし少年はまだ、免許証の裏面の文字に気付いていない。

小さな少女は、免許証の裏面の文字を読み取ろうとした。『シバウチ　ヨウコ、ヤツナミ　ユキ、両名に謝罪』。ユキ、の後に書かれた漢字が、しかし少女には読めなかった。そこで少女は少年を見上げて言った。

「ユキ…」

その続きを読んでくれと目で訴えた。

「え?」

少年は、少女が伝えようとするものが一瞬何なのかわからず戸惑ったが、しかしそれをすぐに判断した。少年を見上げた少女の柔らかい髪に、白い粒が舞い降りて来たからだ。少年は空を見上げた。

「雪」

少年は呟いた。少女の言う通り、街には雪が降ってきていた。小さな少女は周りを見回した。

「わあ、ゆきだ」

建物や歩道に吸い込まれる雪に目を輝かせ、少女は辺りを歩き出した。少女の頭からは、もう免許証の事など消え去っていた。

その場に残された少年は、ゆっくりと足元の財布を拾い上げた。少女が少しはしゃいだせいか、財布の表面にはコーヒーが僅かに零れていた。零れるコーヒー。降り出す雪。少年は探偵事務所を訪れたシバウチヨウコを思い出す。『雪は、運命を分けるもの』。シバ

ウチヨウコはそう言っていた。

少年から少し離れた場所で、小さな少女は天の恵みに感謝でもするように、両手を上に突き出して空を見上げている。この少女が産まれたのはきっと、シバウチヨウコが死んだ頃だ、と少年は思う。『じゃあ、こうばんにとどける』。ブラックコーヒーを片手に持つ少女の声が、少年の鼓膜の奥で錨のような重さを持った。少年はもう一度空を見上げる。無限の彼方から降る小さな白い粒たちは、全ての事を知っているように思えた。

少年は考える。シバウチヨウコは、命を絶つ前に一杯のコーヒーを淹れた。死ぬ前に、自分の大好きだったコーヒーの味を確かめたかったのだろうか。最後にせめて、曇りの無かったかつての自分を思い出したかったのだろうか。しかし、そのあとシバウチヨウコがコーヒーを口にする事は無かった。結局、それを飲んだところでもう昔の自分には戻れない事を、彼女は分かっていたのかもしれない。彼女にはもはやそれ以上、コーヒーを汚す事は出来なかったのかもしれない。

少年が小さな少女の方に目を戻すと、少女は道にしゃがみこみ、歩道に溶ける雪を至近距離でじっと観察していた。離れた所に立つ少女の両親らしき男女は、依然としてその場所でこちらを見ている。

いやそれとも、と少年は考える。シバウチヨウコは最期、もしかしたらその一杯のコーヒーに僅かな救いを見つけていたのかもしれない。沈黙の悪魔を抱きしめて死ぬ前に、かつて直向きに夢を追っていた頃の自分を、その苦く香り立つコーヒーに託したのかもしれない。

免許証と長財布を持った両手に、少年は少し力を入れた。音も無く降りて来た雪の一粒が、長財布を濡らしたコーヒーに溶けて消えた。少年は長財布をしばし見つめ、それからその表面を手の平で拭いた。そしてくるりと踵を返すと、まだ雪の積もらぬ地面の上を歩き出した。

少年は、交番へ向かった。

自分たちの娘の届けた財布を手に持って立ち去って行く少年の姿を、夫婦は遠巻きに見送っていた。
「雪だな」
と夫は言った。
「どうりで寒いはずだよね」
と妻は答えた。
「あの歳の少年でも長財布なんて持つんだな」
「だからコノハの勘違いだって。彼、財布に入ってた免許証みたいなものをじっくり見てた。他人のものだからでしょ。それにほら彼のお尻のポケット、膨らんでない？あっちが彼の財布だよ」
「良く見えないな。でもじゃああの子、あの財布を交番に届けに行くのかな」
「…多分ね」
二人は沈黙した。離れた所で、娘は空から降る雪を見上げ、うれしそうに誰にとも無く何かを言っている。夫が口を開いた。
「そういえば、昔うちの店にヨウコちゃんっていたよな」
妻は夫の顔を見て、一瞬戸惑うような訝るような表情を見せたが、それはすぐに治まった。
「どうしたの急に」
「いや。何となく。元気かなあの子」
言いながら夫は思い出していた。指輪を無くしたという二人組の客が来た時、やけに拳に力を入れ緊張していたシバウチヨウコの事を。
「元気だよ。多分」
妻は答えた。
「あの子、真面目に良く働いてくれてたよな。助かったよ、店長としては」
「…そうだね。私もあの子、嫌いじゃなかった。ううん…好きだっ

た」

言いながら妻は思い出していた。指輪騒動があった次の日の事を。その夜、高校生の妹が自分の部屋に突然入ってきて言った。『マリ姉、この指輪いる？』差し出されたのは銀色の指輪だった。前日に起きた指輪騒動が頭を過ぎった。『え、どうしたのこれ？』聞き返すと妹は言った。『いや、うちのクラスにシバウチヨウコって子がいるんだけどさ、その子が急に今日くれたんだよね。あんまり仲が良い子でも無いからびっくりしたんだけどとりあえず貰っておいたらさ、これ男物っぽいんだよ。いらないわー。まあ一応貰って喜んだフリしといたけどさ』『待って。誰って？』『え？だからシバウチってクラスの子』シバウチヨウコが高校生だという事は自分も知っていたが、学校名までは把握していなかった。そして、彼女がアクセサリーを付けている所を自分はそれまで一度も見た事が無かった。『まあでもマリ姉こそ指輪なんて要らないか。うーん、ネックレスに通すのもなぁ』『その子。その指輪、どうしたとか…言ってた？』あの時手に握った汗をまだ覚えている。次の日曜、マルジュで会ったシバウチヨウコのいつもと変わらぬ笑顔をまだ覚えている。自分はその後、妹が持って来た銀色の指輪を受け取り、それを持ち続けた。そして、やがてマルジュが店をたたむ事になった時、その指輪をマルジュの庭にそっと埋めた。妻は、その一連の出来事をこれまで誰にも明かしていない。

「…そういえば」

ふいに妻は夫に切り出した。

「いつも『ごちそうさま』って言ってくれてた若い男のお客さん覚えてる？ヨウコちゃんが店を辞めるくらいの時から一時期来てた」

「ああ。覚えてるよ」

マルジュは、経営不振で営業を続けられなくなり閉店した。ある時からオーナーの出資が途絶え、家賃を払えなくなったからだ。オーナーは資産家の宝石商だった。オーナーが出資を辞めたのは、オーナーの精神的問題が理由だった。オーナーの息子は自殺した。店

長は詳しく知らないが、複雑な事情があったらしい。それ以来オーナーは塞ぎこんだ。オーナーの息子には店長も会った事があった。彼は、自分がオーナーの血縁者である事を隠したがっていて、マルジュに来店した時も、自分がオーナーの息子である事を店長以外の従業員には明かさず、他の客と同じように飲食代金を支払っていた。そして帰る時には必ず『ごちそうさま』と言ってくれた。

「あのお客さんがどうかしたか？」

夫は妻に聞き返した。妻はそれがオーナーの息子だという事を知らない。

「毎日お店に来てくれた。それでね、店に来て一杯のコーヒーを頼むと、必ず店内を見回してた。誰かを捜してるように」

「誰か？」

「私の想像だけど、多分ヨウコちゃんじゃないかな」

「どうして？」

「確か、ヨウコちゃんがマルジュを辞める日、あの二人は一度だけお店で会った事がある。あの時、ヨウコちゃんは心ここにあらずって感じだったけど、あのお客さんのヨウコちゃんを見る目は何ていうか、うん、特別な感じがした」

「何だよそれ」

夫は笑った。しかしそれでも妻は真面目な顔で続けた。

「それからあの人は毎日マルジュに来た。ヨウコちゃんに、また会いたかったんじゃないかな」

妻の真剣な表情を、夫はそれ以上茶化したりはしなかった。夫には、自殺に至る人の気持ちを想像はできないが、お互いが同じ人間である事はわかっていた。夫は妻の目を見て言う。

「そうか」

「一目惚れって、あってもいいと私は思う」

向こうではしゃいでいた娘はもう十分雪を楽しんだのか、ブラックの缶コーヒーを片手にこちらへやって来た。夫は雪の降る空を見上げて言った。

「そうだな」

そしてそれ以来、二人は二度とシバウチヨウコの話をしなかった。

6　腹の中

大通りを少年は歩く。その手にはもう、茶色の長財布は握られていなかった。雪はまだ弱い。少年は辺りを見回した。通りを彩るクリスマスイルミネーションの中、何組かの恋人達が雪を見上げながら、手を繋いで歩いている。きっとそれぞれが、それぞれの事情で手を繋いでいる。腹の中に様々な思いを抱えながら。

少年は一人考える。例えばそこに真実があるとして、それを知るのと知らないのとでは、一体どちらが幸せなのか。

しかし、どちらが幸せかと分かった所で、知る事知らぬ事を自分で選択できるかどうかはまた別の話かもしれない。目を伏せるべき真実でも、知ってしまえば後戻りは出来ないし、自分に必要な真実でも、知らぬ事に気付けなければそれを知ろうとすら出来ない。そして自分がいずれの状況に立たされるのかは、それこそ知る事ができない。

だが、結局、知ると知らないのどちらの世界に自分が置かれたとしても、自分のなすべき事は変わらないのかもしれない。何を知っても知らなくても、自分は自分の出来る事をするしかない。それ以上は出来ない。拾った財布が如何な責任を委ねて来ようとも、それは変わらない。

交番へ向かう途中、正雄の免許証を財布のポケットにしまおうとした時に、少年は免許証の裏面を見た。『シバウチ　ヨウコ、ヤツナミ　ユキ、両名に謝罪』。その文字を見て、正雄の思惑通り少年は、正雄が指輪を無くしたカップルの男の方だった事を理解した。

少年は、我が家の玄関に帰り着いた。その頃には、雪はだいぶ勢いを増していた。ほろほろと舞い落ちる雪は、郵便受けの上で紡ぎ合わされ、そこでふわりとした白い帽子に変わっていた。頭と肩に

乗った雪を手で払い、一度深呼吸をすると、少年の白い吐息は寒気に溶けて拡がっていった。しばしその様子を見送って、少年は玄関の鍵を開け、家の中に入った。これまで外で起きていた出来事が全て幻だったかのように、玄関の内側には日常の空気が充満していた。もう一度、少年は息を吐く。

「ただいま」

少年が言うと、リビングで新聞を読む父が、

「おかえり」

と答えた。台所の母は、

「もうすぐごはん出来るわよ」

と答えた。家の中は温かい。少年はリビングに行き、そこから台所にいる母に視線を送る。少年はお腹に手を当て、笑顔を作り母に言う。

「お腹空いた」

母は柔らかな瞳を少年に向けて言った。

「早く手を洗ってきなさい」

少年は洗面所へ向かう。この家の三人はこれから仲良く食卓を囲み、ありふれた家庭の風景の中、ありふれた愛を注ぎ合う。きっとこの先もそんな毎日を続ける。少年と、父と、ヤツナミユキの三人で。

正雄の免許証の裏面に書かれた文字を見た時に少年が理解したのは、正雄が指輪を無くしたカップルの男の方であったという事だけでは無かった。ヤツナミユキ。少年はその名前を知っていた。少年の母の名前はユキと言い、母の旧姓はヤツナミだった。少年がこの財布を拾ったのは全くの偶然だ。誰が財布を拾うかなどは正雄にも予想出来なかったはずだろう。

免許証を見た時に少年は考えた。そこに書かれているヤツナミユキとは誰か？母の名前がたまたま、免許証に書かれてある名前と同

姓同名なのだろうか？しかし、ヤツナミという苗字は珍しい。そして母は昔からこの街に住んでいて、指輪騒動のあった十七年前、母は若い女であった。母を置いて他に、それらの条件を全て兼ね備えた『ヤツナミユキ』など存在するのだろうか？少年は思う。免許証に書かれたヤツナミユキとは、自分の母の事なのか？【指輪を無くしたカップルの女の方とは、自分の母なのか？】

交番へ向かう道すがら、正雄の言っていたスモールワールド現象の話を少年は思い出した。そして、少年は推理を始めた。

自分は現在十六歳。夏の生まれの自分は来年の八月、十七歳になる。指輪騒動は、十七年前の十二月、それはちょうど自分が産まれる八ヶ月前に起きた出来事だ。つまり、指輪騒動が起きた時期、母は自分を妊娠していたはずだ。

正雄の免許証に書かれているヤツナミユキが母の事であるのなら、指輪騒動の時、母は自分を妊娠しながら、且つ正雄と共に正雄の恋人としてマルジュに居た事になる。

まさか、自分の父親とは、自分の知る父ではなく正雄なのか、と少年は一瞬考えたが、すぐにそれを否定した。正雄は、付き合った女性について『肉体的な関係を持つような事は無かった』と言っていた。それに加え、献血の話をした時に正雄は、自分の血液型がＡＢ型だと告白していた。

少年の血液型はＯ型だ。献血をした時に、少年自身でそれは調べていた。少年は財布の中を探り、正雄の献血カードを見つけ出した。カードの血液型の欄にはＡＢ型と書かれてあった。ＡＢ型からＯ型はまず産まれない。少年は、自分の父親が正雄ではないと判断した。やはり自分の父親は、今まで自分が父と思っていた人物がそうなのだろう、と少年は思った。

考えてみれば、父は写真を撮るのが好きだ。母と出会ってからずっと、父は母の写真を撮り続けている。母が妊娠中の時の写真も自分は見た事がある。しかしそうなると、母は指輪騒動当時、父と正雄の両方と同時に交際をしていたという事になるのだろうか。

優しい母に限って果たして二股などかけるだろうか。免許証に書いてあるヤツナミユキは、母とは違うヤツナミユキなのかもしれない。

いや、優しさが浮気をしない理由になるのだろうか?そして全国にいるヤツナミユキさんの人数は、浮気をする女性の人数よりも多いのだろうか?

少年はシバウチヨウコの事を思い出す。彼女は、常々真面目と言われているせいで、指輪を盗んだ罪ある自分をさらけ出すのが恐くなってしまっていた。探偵事務所で彼女は言っていた。『人は油断するといつの間にか、周りが思っているように発言し行動してしまう。裏にある自分に蓋をして』。目に見えるその人が、その人全てでは無い事を、少年は既に知っている。

それなら母が二股をかけていたとして、父と正雄はその事実を知っていたのか。父については謎だが、おそらく正雄は知らかっただろうと少年は考えた。正雄はそれを知らないからこそ免許証に『謝罪』と書いたはずだからだ。正雄は言っていた。『周りの人間が知らないような事を知っていると、自分は全てを理解しているように感じてしまいがちだが、果たして本当はどれ程の事を知っているのだろう』。正雄もまた、シバウチヨウコと同じように、銀色の指輪の真相には届いていないのかもしれない。

では、何故母は二股をかけたのか。父が母の写真を数多く撮り続けているのを考える限り、おそらく父は昔から母だけを見て、母を大事に扱ってきたのだろう。それに対して正雄は、指輪騒動の辺りから自分は男が好きだという事に確信を持ち始めたのだから、きっと徐々に嫌われるために、母には冷たい態度を取っていたはずだ。普通に考えれば母が選ぶべき男は父だろう。だがそんな状況でも、いやそんな状況だからこそ、母は正雄への気持ちを持ち続けたという事もあるかもしれない。あるいは父と母は付き合っているというような間柄では無かったが、正雄との空虚な恋に疲れた母には、母を思ってくれる父の温かい笑顔に甘えたくなる瞬間があったのかも

しれない。
ともかくその辺りの事情はいくら考えてもわからないが、ひとまず母は正雄と付き合っている時に、父の子、つまり自分を妊娠していた。
ならば母は、指輪騒動の時、何を考えていたのか。罪は決して単独では存在しない。
指輪騒動の時は自分が産まれる八ヶ月前であるから、母はおよそ妊娠二ヶ月目だった事になる。母は自身の妊娠を知っていただろう。正雄と性的関係が無い事から、それは父の子だという事も母にはわかっていたはずだ。そして母は決断を迫られていた。
正雄は指輪をわざとマルジュに忘れていった。正雄にはもう、マルジュに戻るつもりなど無かったはずだ。しかし正雄と母はマルジュに戻ってきた。つまりそれは、母がマルジュへ戻る事を提案したという事だ。そして母は指輪を捜した。それもしつこく。マリちゃんにゴミ箱を捜索させ、シバウチヨウコを問い詰めたりもした。母が指輪を必死に捜そうとしたのは、やはり正雄の事が純粋に好きだったからだろうか。
少年はしかし、母がマルジュを去る時に言った捨てゼリフを思い出す。
『同じものを買えばいい？違うでしょ。やっぱりあんたはいつも分かってない』いつも。確かその時、母の言葉には『いつも』と含まれていた。という事は、母には以前から正雄に対して不信感があったのか。母は、正雄の事を想いながらも、同時に不信感を抱いていた。
そして少年は、指輪騒動時の母の気持ちを一つの方向に絞りこむ。当時母は、正雄の気持ちを確かめたかったのかもしれない、と。決断を迫られていた母は、最後に正雄が自分の事を好きでいるのかどうか、その気持ちを確かめたかった。そこで正雄の冷めた気持ちがはっきりすれば、母は父を選び子どもを産む。そして実際そうなった。正雄に対する母の去り際の捨てゼリフは、自身にも負い目があ

るのに、いや、負い目があるからこそ、攻撃的な言葉になったのかもしれない。

もし、と少年は考える。もし正雄がその時母に冷たい態度を取っていなかったらどうなっていたのか。母は父では無く正雄を選んだだろうか。正雄を選んだとしたら、そのお腹の子どもはどうしただろうか。少年は首を振る。そこで正雄が冷たい態度を取らないような男なら、そもそも母は妊娠などしていないはずだ。

少年は思う。指輪騒動の時にマルジュにいた母の気持ちを想像してみたものの、結局それはただの憶測に過ぎない。確かに母は、父との子を妊娠しながら、その時正雄とマルジュに居たのかもしれないが、母がお腹の子どもを産むかどうか迷っていたなどという事を示すものは何も無い。あの優しい母が、周囲の人間に左右されて、妊娠したお腹の子どもを産まない選択肢を選ぶなど有り得るだろうか。

だが、少年はふと思い出した。母の言葉を。指輪を捜している時、シバウチヨウコのエプロンのポケットを、いやシバウチヨウコの【お腹】を指差した母が言った言葉を。『自分が望んでいなくても、予期せぬものがそこに入る事だってある』

自分が望んでいなくても。その時母は、一体どのような気持ちでその言葉を言ったのか。少年にとって、それを想像する事はとても荷が重い作業だ。話のその部分を少年が印象強く思っていたのは、偶然では無かったのかもしれない。

住み慣れた家の中で、食卓を囲み、少年と母は今笑顔を向けあっている。温かに見える母子の、それぞれの笑顔の裏にある思いを、その表情からは読み取る事ができない。

免許証の裏に書かれたヤツナミユキが母であると示す確かな証拠はどこにも無い。しかしだからと言って、少年は真相を直接母に問う事は出来ない。そんな事をして、少しでも母の違和感を少年が感

じ取れば、もう少年と母の関係はそれまでのものには戻れなくなるだろう。家への帰り道、少年は思っていた。結局、知ると知らないのどちらの世界に自分が置かれたとしても、自分のなすべき事は変わらないのかもしれない、と。

7　真実の行方

少年の部屋は暗く、静かだ。その日、夜眠りにつくとき、ベッドの中で少年は耳を澄ませた。時の終着点に迷い込んでしまったのかと疑うくらい、部屋は深い静寂の淵にあった。天井や壁までの距離感が掴めない。それらは手の届く程近くにあるようにも思えるし、声の届かぬ程遠くにあるようにも思える。いずれにせよ、カーテンの閉められた窓の外では、今もまだ天から白い粒がしずしずと降ってきているはずだ。沈黙を捧げる街の祈りに応えるみたいにして。

正雄と付き合っていたのが母であったとして、母は指輪騒動の時シバウチヨウコの怪しい左手に気付いていただろうか。右手は開いていたにも関わらず、指輪を握り、頑なに開こうしなかった妖しい左手に。その時シバウチヨウコは、自分の異様な不自然さにさすがに観念していた。正雄がそれに気付いていたのなら、シバウチヨウコを一番疑っていた母がその怪しい左手に気付かないはずは無かっただろう。おそらく、母は気付いていた。

だが、母はシバウチヨウコをそれ以上問い詰めなかった。それは、正雄の気持ちを確かめたかった母が、『指輪なら、また買えばいい』と正雄に言われた瞬間に全ての目的を果たしてしまったからだ。その時にはもはやシバウチヨウコが指輪を持っていようがいなかろうが、母にとってはどうでも良かったはずだ。つまりは母もまた、シバウチヨウコの沈黙の悪魔を看過したという事になる。

それならば、もし母が自分を妊娠していなかったのなら、母はシバウチヨウコを沈黙の悪魔の手から救い出せたのだろうか。もし自分がこの世に存在していなければ、シバウチヨウコは死なずに済んだのだろうか。

いや、と少年は思い直す。自分とシバウチヨウコの関係性はあまりにも間接的だ。そもそも、シバウチヨウコと自分は会った事も無いのだし、今日まで自分はシバウチヨウコの存在すら知らなかった

のだ。自分はシバウチヨウコを追い込んではいないし、自分にはシバウチヨウコを救う機会も無かった。もうこれ以上、ここで何かを想像する事に意味は無い。

少年は目を瞑る。深く、目を瞑る。静寂の中、毛布の温もりで自分の全てを包みこもうとする。隠すように、逃げるように、やがて眠りにつくまで。

『全ての真実が、白日の下に曝される事はあるのか?』そう言ったシバウチヨウコは、全ての始まりである指輪騒動の真相を知らずに死んだ。マルジュで指輪を盗んだ事は、その場の誰にも気付かれなかったと思いながら、彼女は死んだ。しかし実際は、その場の全員が、それぞれの形で彼女の罪に気付いていた。そして彼女の罪を、本人を含め誰もが皆沈黙していた。

しかしその指輪の真相の全容を知る者は、結局誰一人としていなかった。客のために甲斐甲斐しく動き回る店長も、ゴミ箱に手を突っ込むマリちゃんも、的外れな葛藤で焦るシバウチヨウコも、自分の彼女と別れるために指輪が出てこないよう祈る正雄も、秘密を腹に抱え彼氏の気持ちを試すヤツナミユキも、その時、誰も真実など知らずに必死になっていた。たった一つの小さな指輪の真実を知らずに。そして、唯一それを知っているだろう指輪は、何かを語る事は無かった。沈黙の指輪は、ただ静かに光を湛えていただけだ。

その夜、降りしきる雪は、街の全てを等しく白で埋め尽くした。その白の下にどのような真実があったとしても、見た目には何もわからない。マルジュの跡地に埋められた銀色の指輪も例外では無い。少年が生まれ、大きな災難も無く、やがてローンを組みながらも、少年の家族がこの街の更地に建てた念願のマイホーム、その地下に埋まっている赤黒いスーツケースも例外では無い。

スーツケースを掘り出しに来たシバウチヨウコ。あの時、彼女を不思議そうに見つめていた子どもが自分だったなど、少年は気付かぬまま、スーツケースの上で静かに眠る。

明日からまた、この街を人々は忙しなく行き交う。真実の行方など知らぬ人々。彼らは路地裏のゴミ箱や梯子には、もちろん目もくれない。

―終―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3963u/

白の下

2011年6月27日02時10分発行